

古見のプーリィの祭祀と歌謡

波照間 永 吉

一、古見のプーリィと祭祀組織

1 古見の村と聖域

八重山の島々では稲の刈り取りの終わった旧暦6月ミズノエネの日を中心に、豊穰感謝と祈願を目的としたプーリィと呼ばれる祭祀が行われる。中でも西表島古見、小浜島、新城島の上地、石垣島の宮良の村々では、全身を草蓐で覆い、仮面をつけた異形の神が村を訪れるタイプの祭祀が行われ、八重山の他地域のプーリィと異なった様相を呈している。これらの地域のプーリィは俗に「アカマター」と言われるが、それはこの祭祀に登場する異形の神の名に因むものである。すなわち、アカマタ、クルマタ、そして古見ではさらにシルマタ（シィシィマタ）と呼ばれる神が、この祭祀の中の重要な部分に位置するため、そう呼称されてきているのである。

さてこの祭祀は、上記いずれの地域においても機器を利用した記録の作成は言うに及ばず、ノートの作成やスケッチまで一切禁じられてきている。これはこの祭祀そのものが本来、集落の構成員以外の見物を排し、アカマタ神事に関することは他言を禁止するという、古来のタブーに覆われているからである。従って、これらの地域におけるアカマタ神事にまつわる、同時記録は存在しないというのが、建前とあってよい。

しかし、1959年より調査を開始した宮良高弘氏は、当時の古見の有力者A氏の協力を得て、アカマタ祭祀のある程度の部分の写真撮影と祭祀集団および儀礼過程、歌謡などについての記録・研究に成功した。氏の研究結果は「八重山群島におけるいわゆる秘密結社について⁽¹⁾」と題して発表され、研究者の注目を浴びた。と同時に古見の人々には大層な驚愕をもたらした。それは、この祭祀と異形の神にまつわるタブーがまざまざと破られたことに対する驚きと不満からのものであった。氏の報告はその後、「『黒マタ・白マタ・赤マ

タ』の祭祀——西表島古見の豊年祭⁽²⁾、「八重山のいわゆる秘密結社⁽³⁾」、「アカマタ・クロマタの祭祀組織⁽⁴⁾」と稿を改めていった。本稿では、歌謡と祭祀の関わりをみるという観点から、特に「八重山群島におけるいわゆる秘密結社について」を引きたいと思う。

この宮良高弘氏の研究とともに挙げなければならないのは、喜舎場永珣氏の「アカマター神事に関する覚書⁽⁵⁾」である。この論文は大正4年から戦後の昭和21年に及ぶ、宮良、古見、小浜島、新城島の調査資料に基づくもので、祭祀が今よりも、村落内のものとして厳粛かつ盛大に行われていた時代の調査資料であり、その資料的価値は高い、と一応は評価しておいてよいだろう。喜舎場永珣氏の古見調査は「昭和三年から七年にかけての三度⁽⁶⁾」にわたるものである。インフォーマントも当時の古見村の長老であり、資料の信憑性も保証されているかのようにみられる。

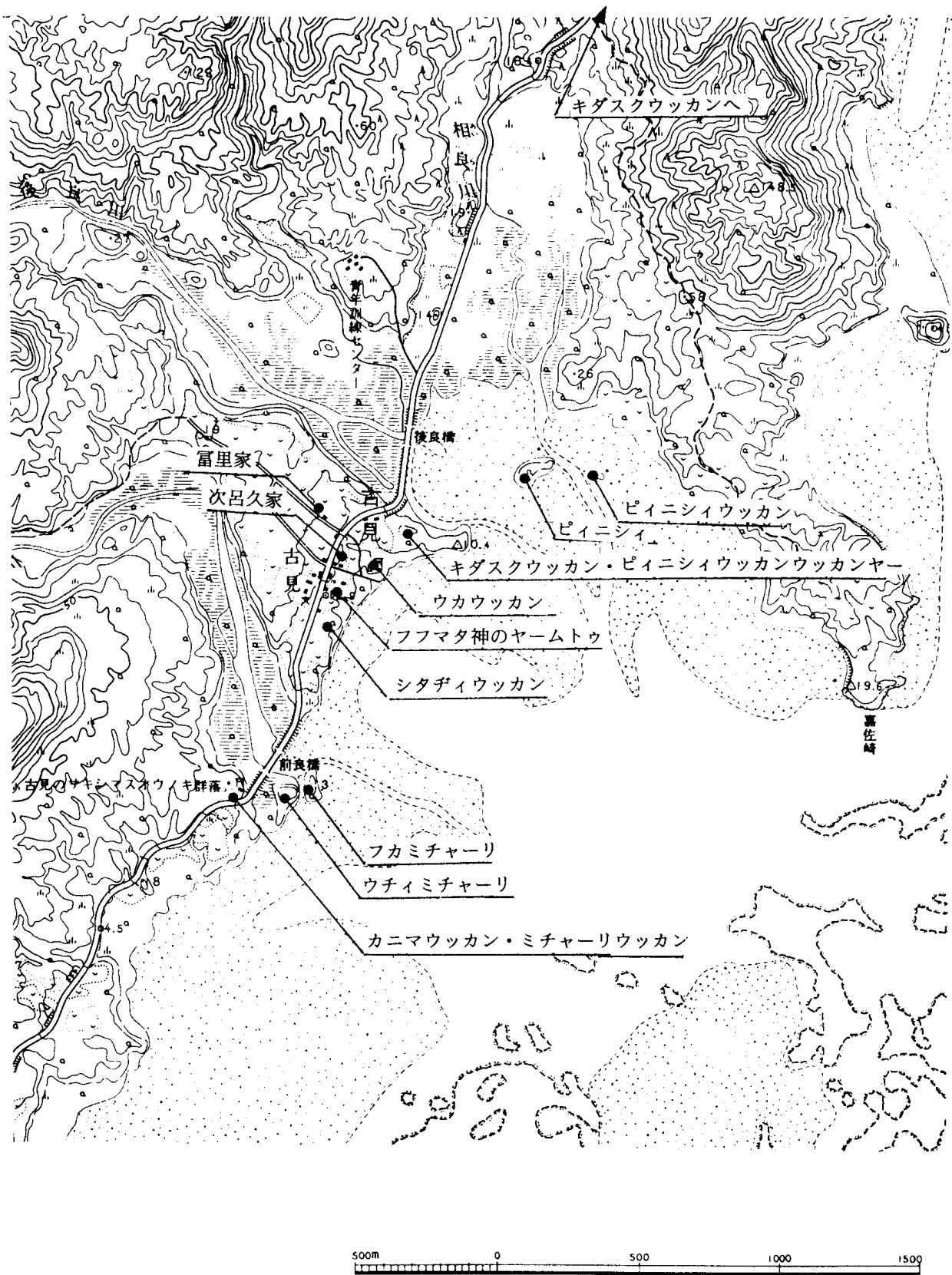
しかし、氏の報告は現行の古見のアカマタ祭祀と根本の部分で大きく異なっているのである。それは氏が「三 古見村のアカマター神祭」の「六 神の神々の面と服装」の項で、「黒マター神の親子」「赤マター神の親子」「白マター神の親子」として、古見の「アカマター神」が6柱存在するとしていることである。現在聞くことの出来る古見の「アカマター祭祀」に関する伝承では、古見の「アカマター神」はアカマタ、シロマタ、クロマタの3神であり、子神の所在については一様にその伝承を否定するのである。もし、喜舎場氏の説くように、氏の調査された昭和3～7年まで6神が存在したというのであれば、いつから現在の形に変容したのか、という大きな問題を抱え込むことになるはずである。それから、氏の掲げた古見の御嶽所在関連地図には現在の地形と御嶽の所在との間に齟齬がみられる、という具合に、細かな点まで見ていくと、疑問なしというわけには行かないのである。しかし、本稿では、古見のプーリィの祭祀の儀礼過程と歌謡の実態を報告するという目的から、上記の宮良論文、喜舎場論文の疑問点について、逐一それを指摘することはしない。特に必要と思われる箇所での疑問についてはそのつど取上げるようにしたいと思う。この問題については、いずれ稿を改め、検討を加えてみたいと思う。なお、本稿との関わりから遊行鬼の「アカマターの村——西表島・古見拾遺記——」⁽⁷⁾も参考論文として挙げておこう。

さて、古見は現在の戸数約20で、人口50数人の寒村である。しかしその歴史は古く、柳田國男は『海上の道』で中国からの稲作渡来の地の1つとしてこの古見を挙げた。⁽⁸⁾ その説の当否は別としても、先史時代からこの地で人間の生活があったことは、八重山考古編年第I期に属する野底貝塚、第III期の平西貝塚、与那良遺跡、古見赤石遺跡、第IV期の由布遺跡、古見旧村遺跡などがあることからも知られる。⁽⁹⁾ 琉球王国の支配に入ってから後の時代の1737年には人口744の大村落をなし、西表島東部の政治・経済の拠点となっていた。しかし、その後はマラリアなどの疫病のために衰退の道を辿った。明治27年に古見を訪ねた笹森儀助は「一時ハ古見ヲ以テ西表全嶋ヲ表スルノ盛況地トナセシモ、今ヤ現在ノ戸口ヲ問ヘハ、戸数四十一、人口百四十二ニ減省セリ」とその衰微のさまを記している。⁽¹⁰⁾ 近代以降の古見も、その立地条件および社会的環境などからゆるやかな人口減少の道を辿っていたが、1960年代に入ると急激な過疎化の波に洗われ、現在見る状態となっているのである。

古見の集落は前良川と後良川に挟まれた平野部に位置している。かつてはこの地域にミチャーリ（三離）、クンムラ（古見村。一名ミユスク）、ウブタ（大枝・大田）、ハナスク（玻名城）、ピニシィ（平西）、ユナラ（与那良、また、キダスク＝慶田城とも）などの村があって、これらの村が古見を構成していたとされる。その中でもミチャーリはウヤムラ（親村）とされていた、という。これらの村の跡は現在も確認され、古見のムーヤマ（六山）と称される聖域・ウツカン（御嶽）がそれらの地域にある（50頁掲載の地図参照）。

古見のムーヤマとはミチャーリ（三離）、カニマ（兼真。喜舎場永珣注6論文に「くんしん」と読むが疑問）、シタヂィ（一名ウーニ＝字根）、ウカ（ウカワとも。請原）、ピニシィ（平西）、ユナラ（与那良。一名キダスク＝慶田城）の6御嶽をいう。これらのウツカンには現在もチィカサやティジィリビなどの神役がいて、御嶽での年中行事の祭祀を執り行っている。なお、カニマウツカンは、もとカニマの村が現在の豊原集落の地にあったのが廃村となったので再び古見に移って来たのだという。カニマの旧村落にあった御嶽の跡は現在も石垣囲いが残っているという。

これらムーヤマ以外にハナスクウツカンがハナスクムラの跡にあり、かつては出征兵士を送る時とその帰還報告の時には参拝したと言われる。ハナス



〈古見のアカマタ神事祭場図〉

クウツカンはウカウツカンのファーウツカン（子御嶽）といわれる。また、ミチャーリはフカミチャーリ、ウチイミチャーリ、ミチャーリと分かれているが、そのフカミチャーリにはパイバラウツカン、アマウツカン、フチイムトウウツカンの三つのウツカンがあるという。そのうちのパイバラウツカンでは戦後までパイバラニガイという、古見の全チイカサ達のみで行う健康祈願の祭祀があったという。またウチイミチャーリにはフナウツカンがあったという。

古見の各ウツカンにはファーウツカン（子御嶽）があると言われる。現在確認されるのはピイニシイウツカンのファーウツカンがウチイピイニシイ島に、キダスクウツカンのそれは由布島にあるアミニガイ（雨願い）のウツカン、シタヂイのそれはナータフーヂイ（長田大主）の火の神ウツカンだという。ウカウツカンのそれは前述のとおりハナスクウツカンである。ミチャーリウツカンのそれはフカミチャーリにあり、カニマウツカンのそれはウチイミチャーリにあるというが、未確認である。

2 古見の年中祭祀とプーリイの祭祀組織

現在古見で行われている年中の祭祀は次のとおりである。いずれもチイカサが御嶽に詣で、祈願の拝礼を行う。旧暦に基づいて執り行う。

- 1月 ショングワチイニントゥー（正月年頭）——正月1日にウツカンに詣でて、1年の豊饒や健康息災のための祈願をする。
- 2月 ニングワチイマチイリイ（2月祭り）——1年の豊穰祈願祭。
 ユーニンガイ（世願い）——島中の諸事の果報と豊饒の祈願祭。この祭祀が行われると、その首尾として8月にキチイグワンを行う。
 ナイヌムヌン（苗の物忌み）——稲の播種後、苗が恙ない成長を遂げるように祈る物忌み。
 フファバムヌン（草葉物忌み）——田植え後に行う。稲の恙ない成長を祈る物忌み。
- 3月 カサムヌン（カサ物忌み）——一名ウヤンチュヌムヌン（鼠の物忌み）とも称される。農作物に害を及ぼす鼠やバッタなどの害虫・獣の災いがないように祈る物忌み。カサ崎でチイカサが籠りを行った。

- 4月 プマチィリィ（穂祭り）——一名プームヌンとも称される。稲の穂の出穂が恙ないようにと祈る物忌み。
- 5月 インドゥミ（海止め）——稲の穂の恙ない成長を祈るために、海を荒らさないようにと、海に出て漁・いざりなどを行うことを禁止する。
ヤマドゥミ（山止め）——インドゥミの後、14日目に始まる。インドゥミと同じく稲の穂の成長を祈るための祭祀。
シクマ——一名プバナアギ（穂花上げ）とも称される。初穂祭りで、結実しだした稲穂を取って神に捧げる祭祀。ヤマドゥミ後、7日目に行う。
- 6月 プーリィ——この1年の豊穰を感謝し、これから始まる新年の豊穰を祈願する祭祀。
- 7月 ソーロンイタチィキバラ（精霊イタツキバラ）——祖先供養の祭りであるソーロンに祖霊とともに後生からやってきた邪霊を祓うための祭祀。
- 8月 キチィグワン（結願）——2月のユーニンガイで立てた願の成就を神に報告し、願を解くための祭祀。
ジュングヤ（十五夜）——8月の十五夜の月を祀る。旗頭を立てパイヌムラ（南の村）とニシィヌムラ（北の村）に分かれて綱引きを行う。南が勝つと豊年になるという。
パイバラニンガイ（南バラ願い）——フカミチャーリのパイバラウツカンに全チィカサが参集して、村人の果報を祈る祭祀。現在は行われていない。
- 9月 クングワジィクニチィ（9月9日）——一名アッコヌニンガイ（芋の願い）とも称される。芋の豊穰を祈る祭祀。同時に村人の健康も祈願する（ドゥーハダニンガイ＝胴肌願い）。
- 10月 ジュングワチィマチィリィ（10月祭り）——一名ジュングワチィタカビ（十月崇べ）とも称する。ニングワチィマチィリィと対で、豊饒を祈願する祭祀。
シチィ（節）——年の新たまりを祝う祭祀。暦（干支）の関係で、7月にシチィが当たる年は豊作との言い伝えがある。

アマニンガイ（雨願い）——順調な降雨を願う祭祀。由布島にあるアマウツカンで行う。

シィマフサラ（島くさらし）——悪疫や流行病が村に入って来ないように祓う祭祀。かつては村を挙げての祭祀であったが、現在はその形では行われていない。

11月 タナドゥリィ（種子取り）——稲の播種祭。苗代に粃を蒔いた日に、種子の恙ない発芽と成長を祈り、豊穰を祈願する祭祀。

これが古見の伝統的な年中の祭祀である。生産構造や生活形態の変化、チィカサに代表される祭祀執行者としての神役の不在（空位）といった種々の事情で、現在行われなくなった行事も中にはある。ただ、全体としては、かつてのように村人全てが関わる形ではなくなったものの、チィカサらの神役だけで祈願を上げることにはなお続けられている。この意味でも古見の伝統的な御嶽信仰は保持されているとみてよい。

ところで、ここで特に注意しておきたいことは、これらの祭祀が農耕や日常の生活との関連は言うに及ばず、祭祀相互の間でも有機的に関係付けられていることである。その有機的な繋がりとは、例えば、2月のニングウチィマチィリィを捧げると6月にプーリィを行うこと。同じく2月のユーニンガイを捧げると8月にキチィグワンを執り行わなければならないというように、「願立て」と「願解き」という関係に複数の祭祀が位置付けられていることである。

さて、ここで、古見のプーリィの祭祀構成についてごく簡単に触れておこう。現在古見のプーリィは次のように行われている。

第1日目——ウンプーリィ。御嶽の神に対して1年の豊穰を感謝する祭儀を行う。祈願の成就の報告で、バンパジ（願解き）とも言われている。

第2日目——トゥーピィ（当日）。午前にはフナクイ（舟漕ぎ）の祭儀がある。「世持神」（アカマタ神）が村に現れ、来る年の豊穰を約束して去る。この日の夜明け前にヤマニンジュ集団への入会の祭儀が行われる。

第3日目——ヤームトゥギシキ（家元儀式）の日。午前にはアサギシキ（朝

儀式)、夕方より、「ミーフミ」、豊年祭、深夜にバガリ(別れ)の祭儀が行われる。

第4日目——トゥリィバライ(取り払い)。決算報告の会合が行われる。

以上がごく大まかな流れである。これらの祭儀をチカサはじめヤマニンジュ集団で執り行うのである。

古見のプーリィの最大の特徴は、「世持神」と称されるアカマタ(赤マタ)、シィシィマタ(白マタ)、フーマタ(黒マタ)神が出現することである。この世持神に関わる祭祀については古くから部外の者に対しては秘密とされてきた。古見の男性のみがこの集団の構成員となれるから、古見の女性といえども、本質的な部分について知ることは出来ない位置にある。それ故、宮良高弘氏はこの男性祭祀集団を「秘密結社」と規定しているのである。⁽¹²⁾

この祭祀集団は概ね年齢階梯によって構成されているが、正確にいうと入団からの年数によってその階梯が決まっているようである。この集団をヤマニンジュ(山人数。ヤマは御嶽の意)というが、その内部は下からウイタビ、マタタビ、ギラムヌ、ナカシジャ・シジャ、ウヤ(ウヤガタ)という構成になっている。以下、ヤマニンジュの各階層について、概略を記しておこう。

ウイタビ

ウイタビとは、初旅の意である。祭祀集団へ入会の認められた者で、入会1年の者をいう。現在は15歳位から入会が認められているが、以前は22歳に入会するという例もあった。

加入に際しては、ユブシィウヤ(烏帽子親)を立てて、集団の長老であるウヤガタに申し出る。その手続きは、先ず最初に新たに入会する者の親がユブシィウヤを依頼して、そのユブシィウヤからナカシジャへ「だれそれを新たに加いさせたいので、ウヤガタで宜しく吟味して下さるようにお伝え下さい」とお願いをする。この依頼を受けてナカシジャがウヤにそのことを申し出ると、ウヤは「この人物については入会は尚早である」と儀礼的に返答する。するとユブシィウヤは再び「この人物については自分が責任をもって指導助言していくので、是非入会を認めて欲しい」とお願いして、ようやく入会が承認されることとなる、という。これが古くからのしきたりだという。入会の可否については、現在はウンプーリィの日にウヤ(有志)が会議をし

て決めるという。

入会の儀礼はウンプーリィが終わり、トゥーピィの深夜午前3、4時頃から行われるという。アカマタ、シィシィマタ両集団の儀礼は、ウカウツカンで行われる。入会を認められるとウイタビとなって祭儀に関わるが、例えば、アカマタ、シィシィマタ神の誕生の場などのようなアカマタ神事の重要な部分に関わることはできない（誕生の場となるウムトゥでは、その聖域内に入ることは許されず、聖域の門から離れた所に待機させられるという）。

ヤームトゥギシキの朝、ウイタビのお披露目の儀礼がある。ウイタビのチィトゥミ（勤め）は正座をして行うが、かつては青竹を2本置いた上に座らされたり、一晩中チィトゥミをさせられたりと、先輩たちに厳しく扱われたという。

ウイタビの衣装は白地に縦縞模様の入った着物である。これをタナシィと称している。帯は後ろで締める。

マタタビ

又旅の義である。入会2年目の者をいう。ウイタビと同様になお低い地位である。衣装もタナシィで、朝儀式の時には、2年目にはウイタビとともにチィトゥミを行い、3年目になってもウイタビの誕生しない年はなおチィトゥミをさせられる。ウイタビの者が加入してこないといつまでもタナシィを着けて、ウイタビの仕事に従事し、上位の階層に上がることは出来なかったという（現在はウイタビの者が誕生しなくても、何年か勤めるとタナシィから紺色の着物に変えて着けている）。

ギラムヌ

立派な者、立派な青年の意。ギラはオモロ語「げらへ」と同語で、立派である、美しいの意を表す接頭語である。若者組で、アカマタ神事を執行する主力集団で、神事の中の最も秘密とされる部分に関わる集団である。ミバライ（見張り。世持神の案内役で、世持神の前に立って先導する）やマイダチィ（前立ち。アカマタ、シィシィマタ、フーマタのシルシバタ＝印旗を持つ）などを勤めるほか、ヤームトゥギシキの諸祭儀を勤める。また、所属するウツカンでの祭儀に際しては、キュウチィ（給仕役）を勤める。

ギラムヌの衣装はクンヂィキンと称されるもので、黒地や紺地に白い縦

縞の入ったものである。以前は入会して7・8年以上経たないとクンディキインは着けられなかった。帯は後ろで締める。

ナカシジャ・シジャ

兄の意である。集団の中でも上に位置し、ギラムヌらを指導・指揮する。シジャの中でも年少の者はナカシジャ（中兄）と呼ばれる。

ウヤ（ウヤガタ）

親の意である。集団の親に当たる存在で、最上層に位置する。1名ウイピトウ（老人）と称されるように、村の長老階級で、アカマタ神事の遂行に大きな決定権を持つ。かつては、各ウツカンでの祭儀に際しては使いの者が往復の案内を勤めた（深夜の祭儀の時は寝ているウヤを起こして祭場まで案内したが、これが骨の折れることであったという。またウヤガタをヤームトウから送る時は「アカハタは〇〇ウヤを送れ、シルハタは〇〇ウヤを送れ」という指示に従って、シルシバタを立てて送ったものだという）。

現在ウヤに属しているのは山里寅吉氏（フーマタの長老）、次呂久弘起氏（シィシィマタの長老）、仲本芳雄氏（アカマタの長老）らである。

衣装はクンディキインで、帯は後ろで結ぶ。なお、神役であるティジイルベーは黒地の服に袋帯を前で結ぶ。

二、古見のプーリィの儀礼過程と歌謡

1 ウンプーリィ

古見のプーリィについての史料の初見は「八重山島諸記帳⁽¹³⁾」である。同書には古見のアカマタ神事のことが次のように記されている。

上代古見島三離嶽に猛之御神身に草木の葉をまとい頭に稲穂を頂出現立時は豊年にして出現なく時は凶年なれば所中之人世持神と名付崇来候終に此御神會て出現なくして凶年相続候得は豊年之願として人に彼形を似せ供物を備ひ古見三村より小舟壱艇つゝ賑に仕出しあらそはせ祭之規式と勤候利生相見得豊年なれば弥其瑞氣をしたひにて無懈怠祭来候今村々に世持役と申役名も是に準て祈申由候 但此時由来伝嘶有之候也

ここに記された世持神はフーマタ神とみてよいだろう。何故ならば、「三離

嶽」は現在ミチャーリウツカンと呼ばれている御嶽であり、フーマタ神はこの御嶽の神であるからである。つまり、現在アカマタ神事として行っている祭祀は18世紀初頭に「上代」のこととして記録されるように、はるか以前より始まっていたのである。ただ1つ注意したいのは、この記事にはフーマタ神しか現れていないことである。アカマタ神、シィシィマタ神はこの時代にはまだ登場していなかったのであろうか。疑問とする点である。

この記録の次に見られるのは更に時代の下った『与世山親方八重山島規模帳⁽¹⁴⁾』で、「古見・小浜・高那三ヶ村之儀、ほふり祭之時あかまた・黒また与て兩人異様之支度ニ而神之真似杯いたし不宜風俗有之由候間、向後可召留事」とある。プーリィの時にアカマタ、クロマタ神を出現させ、神の真似をして祭祀を行うことは宜しくないから、禁止するというのである。しかし、この禁令の下でもアカマタ神事は続けられ、結局王府もそれを認めざるをえず、「生活の疲弊をもたらさない程度に行うよう」にと規制を緩めることになる⁽¹⁵⁾。

このように古い歴史を持つのがアカマタ神事を含む古見のプーリィであり、古見の人々が今も必死で存続に心を砕くのもまた理解されるのである。

さて古見のプーリィは旧暦6月のミズノエネの日から始まる。この日チィカサが古見のムーヤマに詣でて1年の願の首尾を報告し、豊穰を感謝する祭儀を行うのである。それでこの日の祭儀をウンプーリィと称する。現在、チィカサによる祭儀が行われているのはキダスクウツカン(富里サカイチィカサ)、ピィニシィウツカン(仲本セツチィカサ)、シタヂィウツカン(吉峯セツチィカサ)、それにファーウツカンであるピヌカン(ナータフーヂィ=長田大翁主の火の神。大底マアチチィカサ)で、ウカウツカンとカニマウツカン、ミチャーリウツカンの三ウツカンはティジイルベ(手摩り部=男性神役)による祭儀が行われている。

ウンプーリィは潮時に合わせて行われる。満ち潮に乗せて祈願を行うわけである。

以下、仲本チィカサの司祭するピィニシィウツカンでのウンプーリィの祭儀の様子を略記する(1994年7月25日の祭儀である)。

午後0時45分頃 ピィニシィウツカンのイビヘチィカサが入る。ピィニシィウツカンはフカピィニシィ(外平西島。シィラ川の河口部にある周囲200メー

トル程度の小島。この島の東南部に極めて小さな砂浜があり、そこにウツカンがある) にあり、干潮の時には水牛に引かせた車で行く。潮が満ちているときは舟で渡る。イビの入口まではティジイルベである仲本芳雄氏(仲本チカサの夫)が荷物を持って付き従う。仲本チカサはスディナ(胴衣。黒色の神衣装)に着替え、その衣装のまま神庭に入りイビの前に進んで合掌する。そして、神庭の清掃にかかる。

清掃が終わると仲本チカサはウイシュ(御衣装。白色の神衣装)を着け、仲本ティジイルベも黒地の着物に着替える。

午後1時5分頃 仲本ティジイルベは神庭入口に設けられたティジイルベの香炉に線香(沖縄線香。1枚の半分=3本の筋になっている)を上げ、ミョウジ(名字。神の聖名)を唱え、カブグ(香箱)の中から花米をつまみ、香炉の脇に捧げる。その後、パイを行う。パイはいわゆる「四立五屈の拝礼」と呼ばれるもので、⁽¹⁶⁾正座して神前に対し合掌し、立ち上がり合掌、そして再び正座して合掌するというのを4回繰り返す、最後に正座して合掌して終わるという形式である。地域によってはユーパイなどと称されるもので、古見の祭祀では男の拝礼の方法である。なお、ミョウジとは神の名字であり、神に仕える者が自らの身分を明らかにし、祭祀を執行することを神に申し上げることという。ミョウジは、先代のチカサやティジイルベと共に祭儀を行う際に、賢く察知し、受け取るもので、殊更に教示されるものではないという。そして、神に対し奏上する以外はみだりに口外しないこととされている。

イビではチカサが同様に拝礼を行い、これからウンプーリィを行うことを神に言上する。この拝礼が終わると、再び線香を上げ、願詞を唱える(豊穰感謝の言葉を申し上げ、また、村中の者を健康であらせてください、という意の願詞を上げた、とのことである)。そして、花米をつまみ、香炉の脇に撒く(3度)。次の盃のグシ(神酒)を戴き(カミルという)、カザリィクピン(飾り小瓶)から注ぎ足し、そして香炉の脇にこぼしかける。その後でパイ(女性の神職のパイは、合掌した手を床にトントンと軽く打ちつける様式)を行い、再び、上記の一連の祈願の行為を繰り返す。ここまでは、バンパジ(願解き)をするための予備的な祭儀で、自らがバンパジの祭儀を行う者で

あることを神に知らせるためのものという。

なお、シタヂィウツカンでは、イビで祈願を行っているチィカサが「ウーパイ アギヨーリ」（御拝を上げなさいませ）と声を掛けるとイビの門前に控えているティジイルベーは、肩の高さまで上げた両手の掌を下に向けて打ち振るパイ（拝。一般にミスパイ＝三十拝と称される所作）を行った。

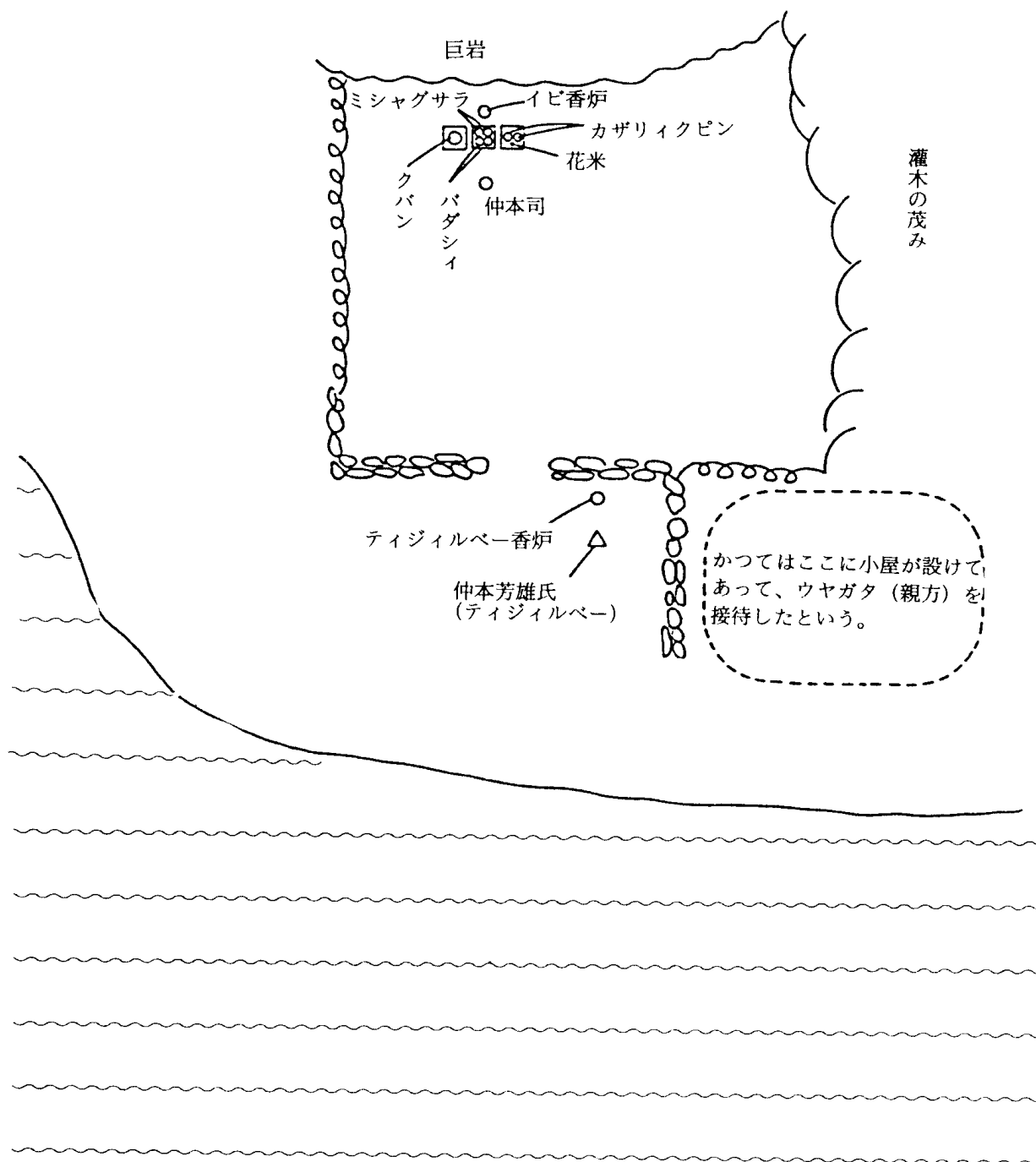
午後1時10分頃 イビの香炉の前にチィカサがミシャグの膳、花米の神酒（一对のカザリィクピン）、イフダイ（盃台。盃が花米の上に据えられている）の膳、クバン（カツオのなまり節にニンニクの粒を添える）の膳を饗る。これらの品が神饌である。

午後1時15分頃 チィカサがイビ香炉に線香を上げ、願詞を唱える。願詞の奏上の後、花米をつまみ、香炉の脇に撒く（3度）。次に盃の神酒を香炉の脇にこぼす動作を2度行う（左右のカザリィクピンから注ぐからである）。そして最後にクバンの初を起こす（クバンを箸で挟んで裏返す）。これらの一連の行為をマチィリィという。この後パイとなる。この時、ティジイルベーもティジイルベーの香炉の前で男のパイ（上記）を行う。これで1回目のパイ（祈願）が終了となる。

午後1時20分頃 チィカサは携えてきた瓶から神酒をカザリィクピン（一对）に注ぎ足し、花米も入れ足し、クバンも入れ足して、再び線香を上げ、2回目の祈願を上げる。拝礼の手順は1回目のその繰り返しで、ティジイルベーも神女がパイを行う時は「四立五屈」のパイを行う（図1参照）。

午後1時40分頃 バンパジィのための5回のパイ（祈願）が終了。チィカサは線香を上げ、合掌する。ティジイルベーが盃の神酒を戴き、チィカサは神饌を下げる。イビの門の前でチィカサとティジイルベーが対座して、チィカサからティジイルベーに対し口上があり、その後で神酒の盃が渡され、ティジイルベーがこれを戴く。これで、ピィニシィウツカンのウンプーリィは終了となる。

ウンプーリィでは上記のように5回のパイ（祈願）が行われる。これをイチィパイ（五拝）と称している。これは、本日のバンパジィまでに、豊穰を招来する為に行われた5回の祭祀の願解きとしてなされるものである。イチィパイの前提となる5つの祭祀は、ジュングワチィマチィリィ、ニングワチィ



〈図1 ピニシウツカンでのバンパジィの時の図〉

マチィリィ、カサムヌン、プマチィリィ、ドゥーハダニンガイである。近年はイチィパイが続いているが、かつてはナナパイ(七拝)、ククヌパイ(九拝)という年もあった。因みにナナパイは、上記の五祭祀に、シィマフサラとパイバラニンガイの2祭祀を加えて行った年のバンパジィであり、ククヌパイはこの7祭祀に更に特別な2祭祀(農作物の豊穰招来の為の祭祀。例えば、害虫が発生した場合に行われる害虫祓除の為の祭祀)が加わった年に行われたという。

2 ウンブーリィのウツカン巡りの祭儀

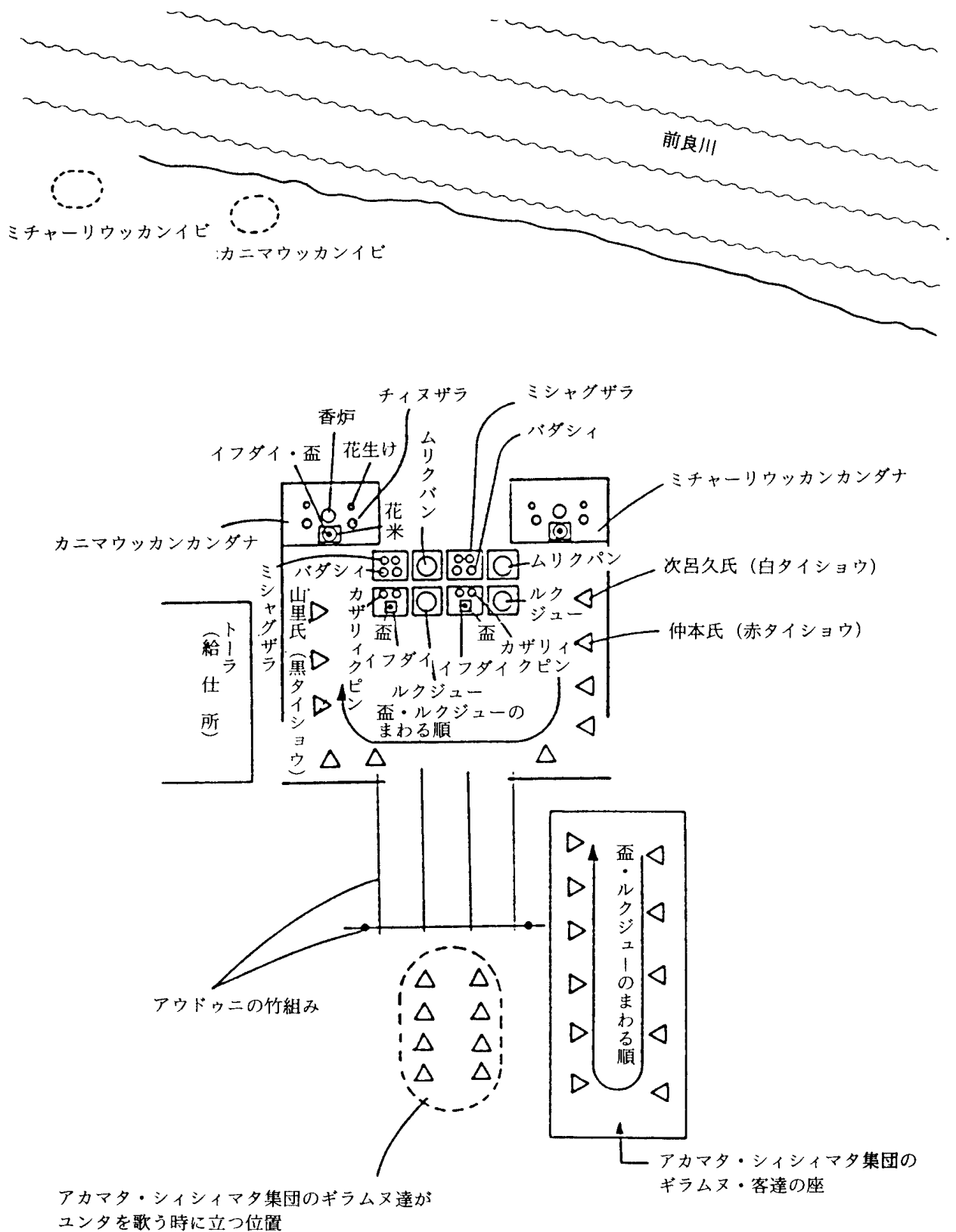
ウンブーリィの夕方より、ヤマニンジュ集団によるムーヤマと称されるウツカン巡りがある。これはフーマタ神を祀るミチャーリ、カニマの両ウツカンから始まって、シィシィマタ神を祀るシタディ、ウカの両ウツカン、アカマタ神を祀るピニシィ、キダスクの両ウツカンへという順で廻る。それぞれのウツカンのヤマニンジュが他のウツカンのヤマニンジュを招待するという形で行われている。以下、この祭儀の様子を略記する。

①ミチャーリウツカン

午後6時30分頃 ミチャーリ、カニマの両ウツカンのカンダナ(神棚)を設けてあるウツカンヤの内部にウヤやシジャたちが着座している。ここには、部落に居住しているがヤマニンジュとなっていない人(例えば校長先生など)も招待されている。

ウツカンヤの両カンダナには花米と神酒(泡盛)の載せられた膳とミシィをいれたチィヌザラ(角皿)、ミシャグザラが飴られ、香炉には線香が上げられる。カンダナの下には、ミチャーリ、カニマ両ウツカンそれぞれに、ムリクバンの皿を置いた高膳とルクジュ(六条豆腐)の皿を置いた高膳の二つが置かれている(都合四つ)。ムリクバンはグルクンなどの小魚を焙った(現在は油で揚げた)ものを束ねて立てたもので、この両ウツカン以外では供えない。

ウツカンヤの庭には筵敷の座が設えられており、ここにはアカマタ、シィシィマタ両神を祀る他のウツカンのギラムヌやマタタビ、ウイタビが座る(図2参照)。



〈図2 カニマ・ミチャーリ両ウツカンでの祭儀〉

カニマウツカンのティジイルベーであり、フーマタ神のタイショウ(大将)でもある山里寅吉氏がシィシィマタ神のタイショウである次呂久弘起氏と対座して、カニマウツカンのグシパナヌサキ(御酒はなの酒)を献杯する。次いでルクジュを差し上げる。この後、山里氏が口上をのべ、次呂久氏も返礼の挨拶をする。一座の人々への神饌の献進が一段落すると、酒と肴、それに吸い物が振る舞われる。給仕を勤めるのはフーマタ集団のギラムヌ以下の者である。

接待が終わると、庭の座敷にいたアカとシロのヤマニンジュがウツカンヤーに正対して立ち、ドラと太鼓に合わせてユンタ「ミツバナリ」をうたう。現在は、ここでのユンタのうたい出しはシタヂィウツカンのヤマニンジュがする形となっている。ウツカンヤー内部のウヤやシジャ達はそれを聞く。

歌唱法は一同が甲と乙に分かれ、1節ごとに分担を交互に変えていく交互歌唱法である。歌謡に伴う特別な所作は無い。

このユンタのうちの3節をうたったところで歌唱を切り上げ、アカマタ、シィシィマタのギラムヌら一行はウツカンの神庭から出て、門前でウヤやシジャらが出てくるのを待つ。

一同が揃うと太鼓、ドラをはじめ、歌唱者たるギラムヌを先頭にしてミチャーリウツカンからシタヂィウツカンへの道行となる。道行の際には「クムラユンタ⁽⁷⁾」がうたわれる。

歌唱は道行の一団が甲と乙に分かれてうたう交互歌唱法である。しかし、本来は反復歌唱法であったといわれる。歌謡に伴う所作は特に無い。

②シタヂィウツカン

午後7時45分頃 シタヂィウツカンに先に着いたギラムヌ達は、全員が到着するまで、「クムラユンタ」をうたい続ける。シタヂィウツカンに着くとウヤらはウツカンヤーの中に入り、着座する。ウツカンヤーではウイシュ(御衣装。神衣)を着けたチカサが一行を迎える。シタヂィウツカンのギラムヌはすぐに接待の準備に取り掛かる。

午後7時50分頃 チカサがカングダナの香炉に線香を上げ願詞を唱え、ウツカンヤー内に居るウヤら一同はパイを行う。その後、シタヂィウツカンのウヤである大底功氏が挨拶の口上をし、山里氏(カニマウツカンのティジィ

ルベで、フーマタ集団のタイショウ)にグシパナヌサキを献杯し、ルクジューを進める。この二つの品はウツカンにいる全員にまわる(図3参照)。

午後8時頃 酒と肴、吸い物が一同に振る舞われる。吉峯チカサが山里氏をはじめ、招待された一同に挨拶をし、フバナグシを献進する。この神酒は一名チカサアッパーヌフバナグシ(司姥の穂花酒)、ウフチカサヌフバナグシ(大司の穂花酒)とも称される。吉峯チカサの次に、大底チカサのフバナグシが同様に一同に献進される。この間チカサはウイシュを着けたままである。

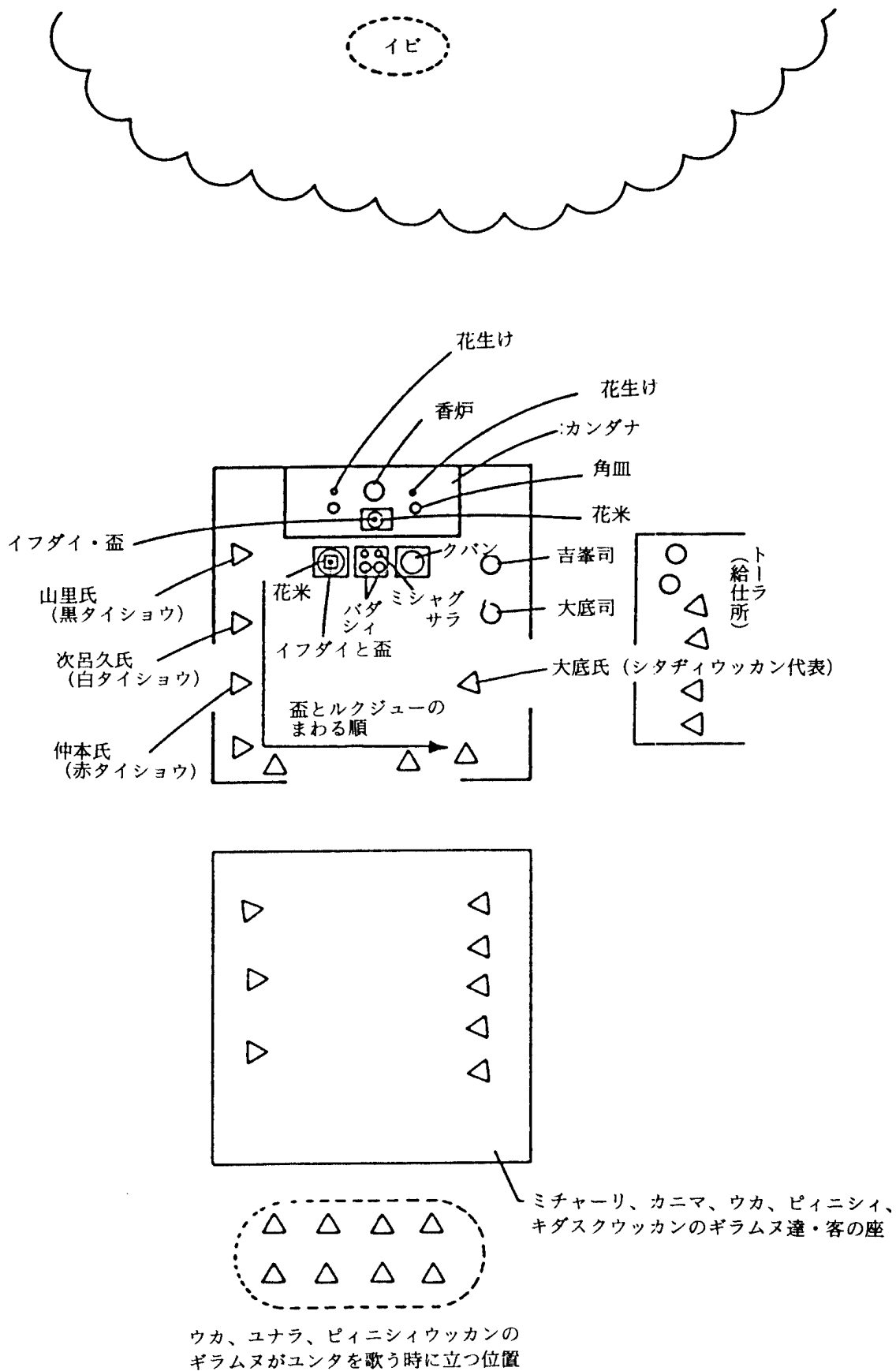
午後8時20分頃 シタディウツカンのウヤが挨拶を述べ、山里氏が返礼の挨拶をする。これが済むと、他のウツカンのギラムヌらは立ち上がってウツカンヤーに正対してユンタをうたう。ユンタは太鼓とドラに合わせてうたわれる。シタディウツカンでのユンタはミチャーリとカニマウツカンのギラムヌらがうたい出すことになっている。シタディウツカンでのユンタはミチャーリウツカンと同じ「ミツバナリ」である。ミチャーリウツカンと同様に3節までうたう。

歌詞、歌唱法、所作などはミチャーリウツカンでのそれと同じであるので、記述を省略する。

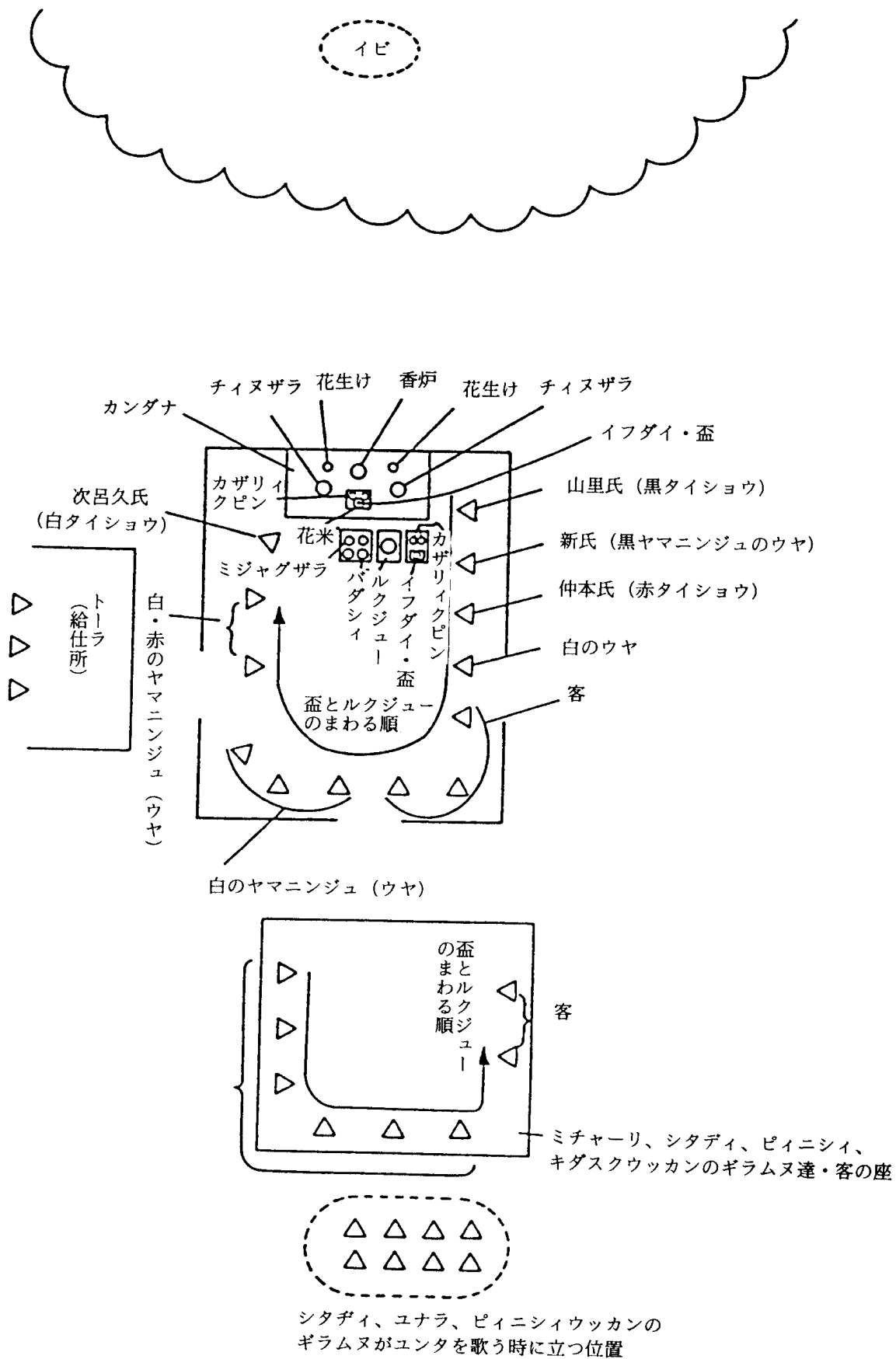
午後8時35分頃 シタディウツカンを一同は出立するが、その時、他のウツカンのギラムヌらは「クムラユンタ」をうたって先導する。この時の歌詞・歌唱法・所作などは先のものと同様である。

③ウカウツカン

午後8時45分頃 一同がウカウツカンに到着する。ウカウツカンのティジイルベである次呂久弘起氏は先にウツカンヤーの中に控えていて、ウヤやシジャー一同がウツカンヤーに着座するのを待つ。次呂久氏がカンダナの香炉に線香を上げ、願詞を唱え、ウヤら一同はパイを行う。その後、次呂久氏から山里氏へグシパナヌサキとルクジューの献進があつて、この2品が全員にまわる。次呂久氏は再び線香を上げる。そして山里氏と挨拶を取り交わす。挨拶の内容は「今年は豊年をたまわりました。来年も豊年でもっとおいしいお酒を飲ませて下さい」というものである。酒、肴が振る舞われ、一同歓談となる。トーラ(給仕所)ではシタディウツカンに属するギラムヌらが給仕



〈図3 シタディウツカンでの祭儀〉



〈図4 ウカウツカンでの祭儀〉

役を勤める（図4参照）。

午後9時20分頃 次呂久氏が線香を上げる。

午後9時25分頃 シタヂウツカン他のウツカンのギラムヌらが立ち上がり、ウツカンヤーに正対してユンタがうたい起こされる。ユンタは太鼓とドラに合わせてうたわれる。ウカウツカンでのユンタは「ウムトゥバナリ⁽¹⁸⁾」である。

歌唱法は本来は反復歌唱法である。時によっては、一同が甲と乙に分かれ、1節ごとに分担を交互に変えていく交互歌唱法でうたわれることもある。歌謡に伴う特別な所作は無い。

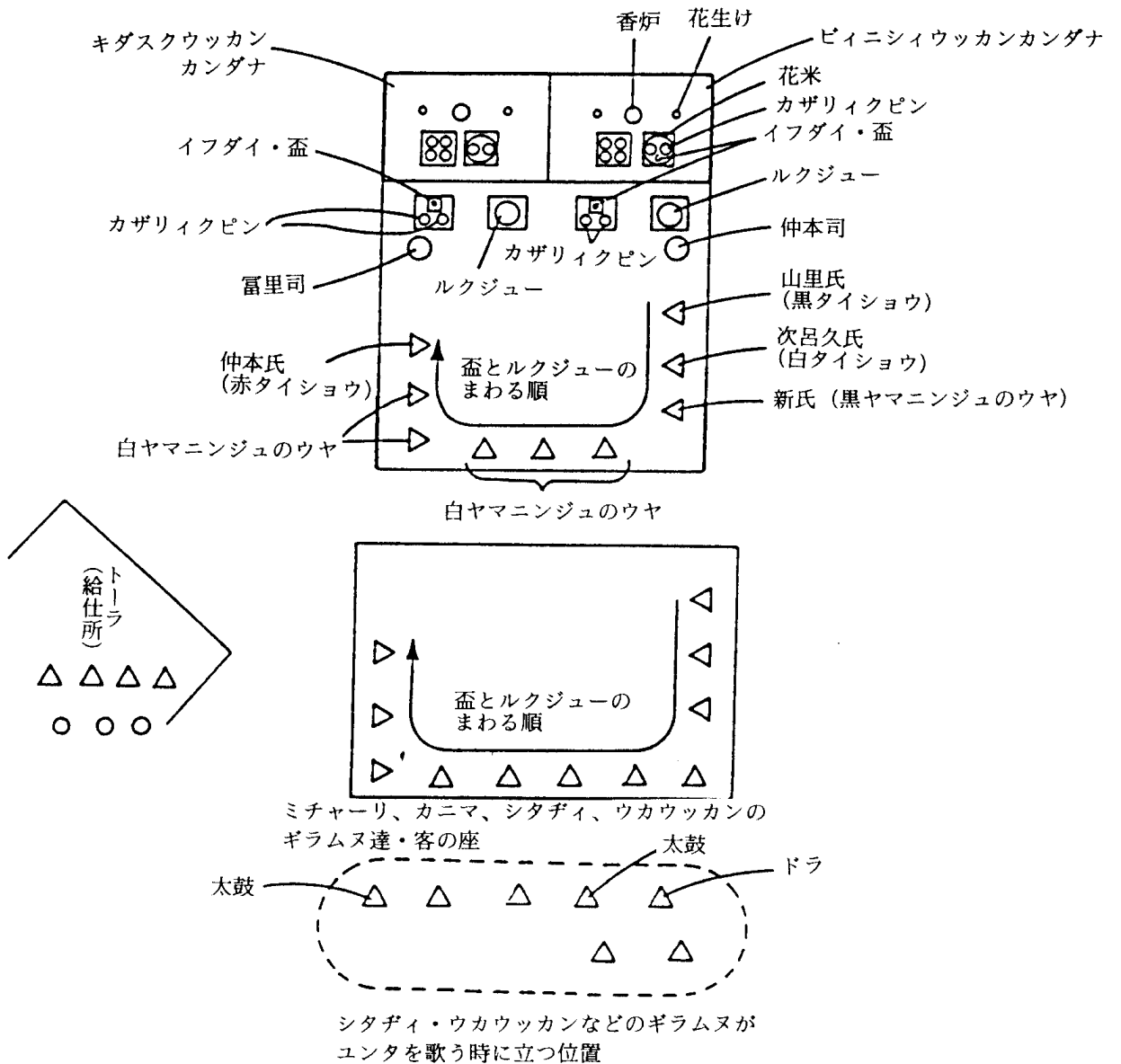
④ピニシウツカン・キダスクウツカン

午後9時30分頃 一同がウカウツカンを出立する。道行には「クムラユンタ」がうたわれる。歌唱法などはこれまでと同一である。（本来は反復歌唱法であるが、現在は交互歌唱法も行われている）。

午後9時35分頃 ピニシウツカン・キダスクウツカンのお通しのウツカンヤーに一同が到着する。先に着いていたギラムヌらは神庭でユンタをうたってウヤらの一行を待つ。かつてはウツカンの入口で待ってうたったという。ウヤら一同がウツカンヤーの中に着座すると、ピニシウツカンの仲本チカサ、キダスクウツカンの富里チカサはそれぞれの祀るウツカンのカンダナの香炉に線香を上げ、願詞を唱える。それに伴って、ウヤら一同はパイを行う。一同のパイはピニシウツカン、キダスクウツカンそれぞれに対して行われる。従って「四立五屈」が2回繰り返されるわけである。その後、仲本芳雄氏（ピニシウツカンのティジイルベで、アカマタ集団のタイショウ）がピニシウツカンのカンダナに合掌して、同氏より山里氏へグシパナヌサキとルクジューの献進がある。そしてこの2品が全員にまわる。次いで、キダスクウツカンのカンダナにも合掌し、同様にグシパナヌサキとルクジューの献進を行う（図5参照）。

午後9時50分頃 酒、肴、吸い物が一同に振る舞われる。

午後10時5分頃 仲本チカサが山里氏と次呂久氏に対し、口上を述べ、フバナグシを献進する。次いで富里チカサも同様に山里氏と次呂久氏に対し、口上を述べ、フバナグシを献進する。



〈図5 ピーニシイ・キダスクウツカンのお通しでの祭儀〉

午後10時30分頃 仲本芳雄氏の挨拶がある。

午後10時40分頃 ピニシウツカン・キダスクウツカン以外のウツカンのギラムヌらが立ち上がり、ウツカンヤーに正対してユンタがうたい起こされる。ユンタは太鼓とドラに合わせてうたわれる。この両ウツカンでのユンタは「クムラユンタ⁽¹⁹⁾」である。

歌唱法は本来は反復歌唱法である。現在は時に一同が甲と乙に分かれ、1節ごとに分担を交互に変えていく交互歌唱法でうたわれることもある。歌謡に伴う特別な所作は無い。

ピニシウツカン・キダスクウツカンでの祭儀が済むとウツカンプーリーのウツカン巡りは終了となる(調査が許されているのはここまでである)。その後、ギラムヌらはウカウツカンへ行き、そこで明日の朝の祭儀に供える神饌のズー(和え物)を作るといふ。なお、喜舎場永珣によると、ミチャーリウツカン(クロ)、ウカウツカン(アカ・シロ)で、神迎えのための祭儀が行われる⁽²⁰⁾という。

これらの祭儀が済むと、この後ウツカンヤーではチカサらのユングマリイ(夜籠り)がある。以前のユングマリイはウプチカサとバギイチカサ、それにティジイルベの3人で行ったという。年によっては、一夜籠りのユングマリイと二夜籠りのユングマリイとがあった(これについては、ミズノトの日に世持神は出現するので、その日を待つために二夜籠り、三夜籠りをするのだという。二夜籠りを行う年のプーリーをミーカプーリー、三夜籠りのそれはユーカプーリーと呼ぶ。その時には男衆は漁をして、ヤームトゥに集まって食したりして時間をすごしたという。20年程前に一度ユーカプーリーの年があった——大底朝要氏談)が、現在は一夜籠りとなっている。ユングマリイの間はずっと線香をたき続け、絶やさないようにする。この線香をピーマチコー(日待ち香)と呼んでいる。チカサらはユングマリイをして、明るる朝のハチウクシ(初起こし)を迎えるという。

3 トゥーピイの祭儀の儀礼過程と歌謡

トゥーピイの祭儀のうち見学が許されているのはフナクイとアカマタ、シィシィマタ、フーマタ神の来訪の場とアカマタ、シィシィマタ神の別れの場の

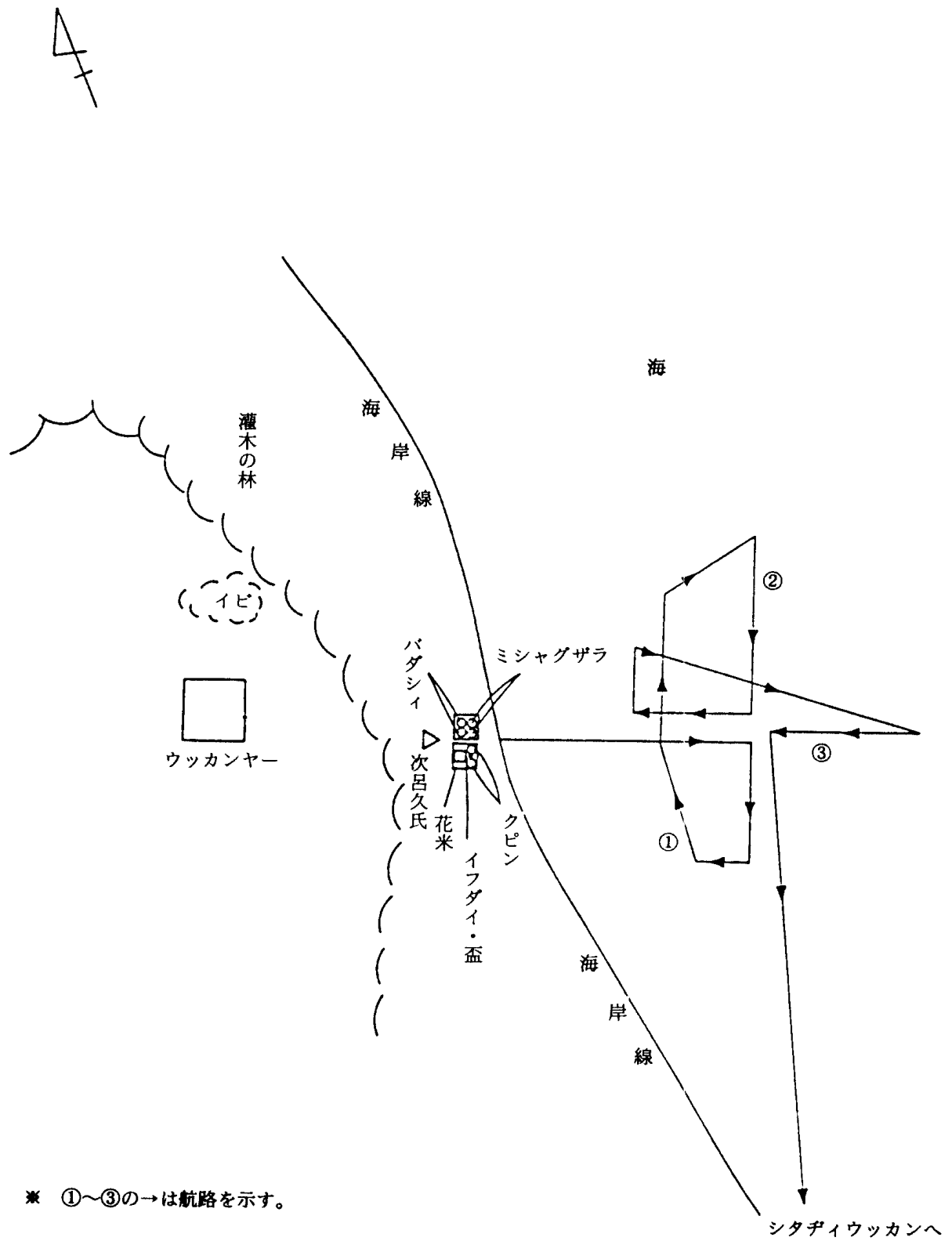
みである。それ以外の祭儀については若干のことを伝え聞くのみである。ここでは見学が許されている祭儀についてその概略を記述する。

①フナクイ

フナクイはかつて行われていたが、現在はほとんど行われぬ。近年では筆者が調査を許された1991年が一番新しいものである。かつては、トゥーピの朝の儀式の1つとして日の出とともに行ったという伝承もあるが、古見の前の海はごく浅く、満ち潮でないと、舟は漕げないという。フナクイはヤイヌユヌニガイ（来年の豊饒の願い）の1つの祭儀である。アカマタ、シィシィマタ、フーマタそれぞれの集団が別個に漕ぐと言われる。以下、調査することの出来たシィシィマタ集団のフナクイ（1991年8月1日）の様態を略述する。

午前9時20分 ギラムヌら数人が集まって舟の準備をしている。舟はグラスファイバー製の小舟。舟の準備が整ったところで、シィシィマタのタイショウである次呂久弘起氏がウツカンヤーに供えてあった花米とカザリィクピン・盃を載せた膳とバダシィ、ミシャグザラを載せた膳を持って浜に出てくる。浜に筵を敷いて、そこに神饌を飭り、砂盛の香炉に線香を上げて、願詞を唱える。そして、パイを行う。白衣装に白鉢巻きの少年（次呂久弘起氏の孫）がウーニ（御舟の意。舟の前部で、シルシバタを持って立つ。10歳前後の少年が選ばれる）として舟の前に立つ。ここで、舟の軸先、中、艫に神酒がこぼしかけられ、舟に乗り込む大底朝要・大底博氏、田房敬助氏は次呂久氏より盃をもらい、舟に乗り込む。かつては、櫂を舟べりに立てて、それから神酒、ミシャグをまつた。40数年前からは歌をよく知っている4人が乗り、舟を漕いでいるようである。

午前9時30分頃 舟の前部にはシィシィマタ集団の印旗を持って立つ少年、中央から後部に太鼓を携え、ユンタをうたう大底朝要・大底博氏が座り、後部に竿をさす田房氏が立つという陣容でフナクイが始まる。フナクイは3回沖に漕ぎ出し、そして陸を目指して漕ぎ戻ると言われる。この時に「ヘットー ハットー」の掛け声を掛けるのだという。陸からは「フナクイユンタ」⁽²¹⁾は聞こえないが、沖に漕ぎだす時にうたうようである。海上でフナクイをしている間、次呂久氏は正座してその様子を見守っている（図6参照）。



〈図6 ウカウツカン東の浜でのフナクイの時の図〉

「フナクイユンタ」の歌唱法は反復歌唱法。舟の前の人が先唱者。後方
人は後唱者となる。歌謡に伴う所作としては、第3節・6節の「ハヤシ」（「ヘッ
トー、ハットー」という掛け声）のところで印旗を上下に突き上げ、下ろす
所作を繰り返し、最終節（第9節）をうたい終えて発せられる「ヤーグリホッ
ホ」の掛け声に合わせて、旗竿を前方に倒す所作がなされる。

午前9時50分頃 ウカウッカンの前の浜で3回のフナクイが終わると、シ
タヂウツカン目指して全力で漕ぎ、シタヂウツカンの前の浜に乗り上げ
る。シタヂウツカンの浜では吉峯チカサが盃とカザリクピンを持ち、
大底チカサがクジィ（トウヅルモドキ）の葉数本を持って待機している。
2人のチカサはカザリクピンを持った両手を交互に上下させ、歓喜の様
相で舟を迎える。舟を浜に乗り上げると、大底朝要・大底博氏は浜に下り立っ
て盃を受け、クジィの葉を受け取って、乗り組んでいる者に渡す。それぞれ
頭に蔓を巻付け、冠り物とする。また、舟の軸先にもクジィを1本立てる。

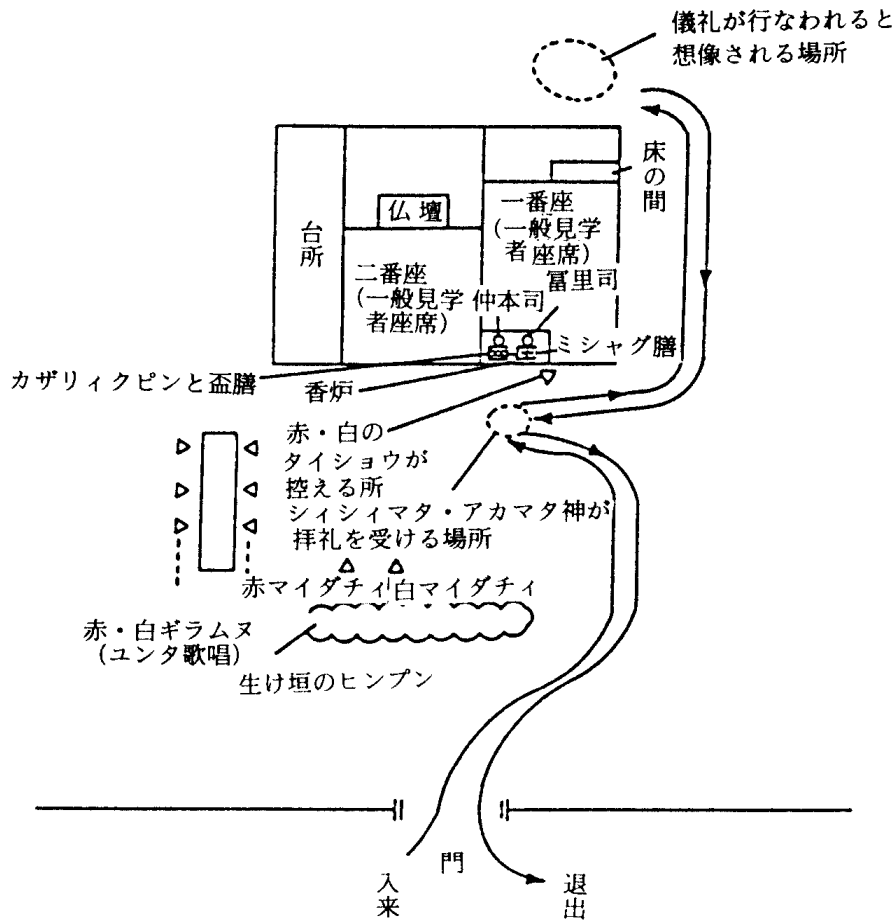
午前10時頃 シタヂウツカンの前の浜を出発して、ハナシクウツカン、
ピニシウツカン、キダスクウツカンの後方の浜（シーラ川の河口部右岸）
に向かう。舟が到着するのを富里チカサが迎える。一同は舟から陸に上が
り、富里チカサと対座して（印旗を持つ少年はフナクイの3人の後方に立っ
たまま）、チカサの持ってきたシィチカザ（イリオモテシャミセンヅル）
を受け取り、頭に巻く。そしてチカサからカザリクピンのグシを戴き、
ねぎらいの言葉を受ける。このあと印旗を先頭にシィシィマタのヤームトゥ
に行く。「クムラユンタ」の第四・五・六節の歌詞を繰り返しながら
の道行である。⁽⁷⁾

②世持神の来訪の祭儀

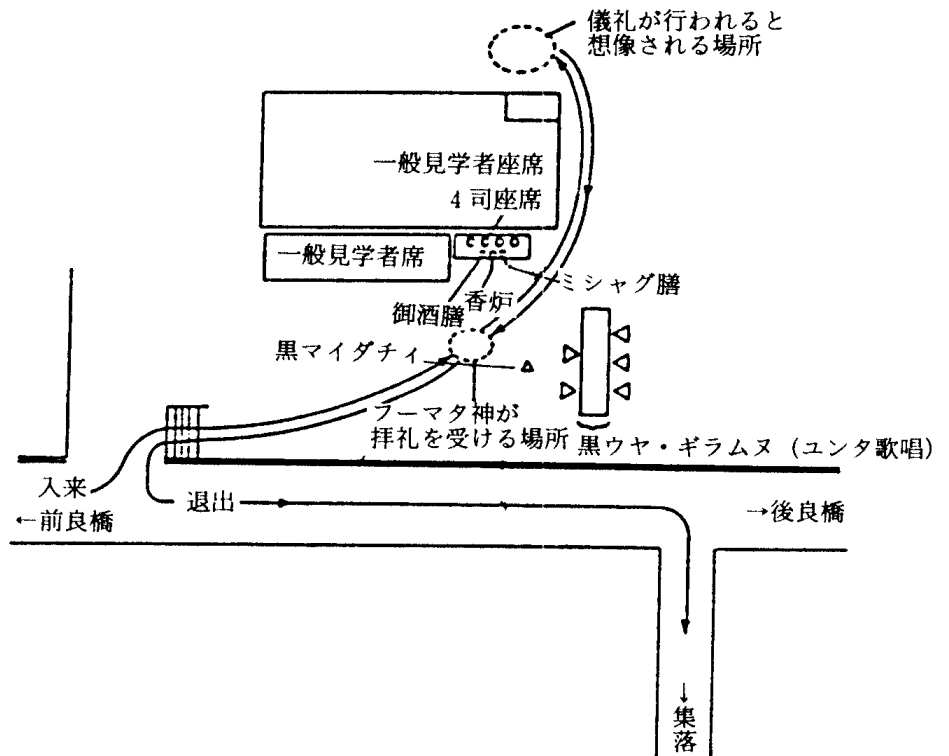
アカマタ神、シィシィマタ神、フーマタ神を世持神と称している。これら
の神が豊饒をもたらす神であるからである。この神々に関する伝承は先に見
た喜舎場永珣、宮良高弘氏らの論文に詳しいのでここでは繰り返さない。以
下に、世持神のヤームトゥ来訪の現場の様子を略記しておく（時間の表示は
割愛する）。

〈富里家への世持神の来訪〉

富里家はシィシィマタのヤームトゥである。太鼓とドラの音が段々と富里



〈図7 シシイマタのヤームトゥでのシシイマタ、アカマタ神拝礼の時の図〉



〈図8 フーマタのヤームトゥでのフーマタ神拝礼の時の図〉

家に近づいてくる頃⁽²³⁾、富里家の玄関に設えられた祭場に富里チイカサと仲本チイカサが着座し、富里チイカサが線香を上げる。ミバライのギラムヌがドラを激しく打ち鳴らし、屋内で神を礼拝しようとしている一座の者の注意を喚起する。やがて印旗を持つマイダチイを先頭に、神を讃える歌をうたうギラムヌ、シジャ、ウヤの集団が富里家の庭に入ってくる⁽²⁴⁾。その後からシイシイマタ神が姿を現す。先導を勤めてきた仲本氏が富里チイカサの脇に控え「シイシイマタ シイサリ」(白マタ神様、ああ尊)と口上すると、一同は拝礼する。チイカサは願詞を唱え続ける。シイシイマタ神はすぐに姿を隠す。すると次にアカマタ神が出現する。今度は次呂久氏が富里チイカサの脇に控え「アカマタ シイサリ」と口上すると、一同は先と同様に拝礼する。アカマタ神もすぐに姿を隠す。仲本氏が富里チイカサの前に飜ってあったカザリイクピンと盃を持って行く。次いで、ミシャグの入ったバダシイとミシャグザラを持って行く。暫くあって、再び世持神の出現があるが、この時も出現の順序は先と同じであり、形式も同じである(図7参照)。

この間、ギラムヌ、シジャ、ウヤらはユンタをずっとうたい続けている。世持神が先に富里家の門を出て、ウヤ以下のヤマニンジュ集団は外に出、次の来訪先であるアカマタのヤームトゥとなっている次呂久家に向かう。

次呂久家での世持神の出現も富里家でのそれと同じ形式で行われるので、以下の記述は割愛したい。また、フーマタ神は1柱で、フーマタ集団のヤームトゥのみを来訪するのであるが、これについても参考のために図のみを掲げ(図8)、記述は省略に従いたい。

③世持神送り

世持神はそれぞれのヤームトゥを来訪し、ユー(豊饒)を授けると、すぐに村から去っていく。フーマタ神がヤームトゥを来訪している時、シイシイマタ神、アカマタ神はピイニシイ島で神送りの祭儀を受け、神の国へ戻る準備を整えている。ピイニシイ島の浜にはアカ・シロ両集団のマイダチイ2人と太鼓、ドラを持ったギラムヌが立っている。暫くあってシイシイマタ神、アカマタ神の順に浜に下り立ち、やがてシーラ川の河口岸を目指して移動を始める。両神がある程度ピイニシイ島から離れると、マイダチイ以下の6人は両神を追って駆け出す。両神はピイニシイ島から西表島に渡る間、7回立

ち止まり、シーラ橋で見送るチィカサ以下の村人の方を向く。この時、後ろに付いているマイダチィ以下の者は印旗を前方に倒し、深々と頭を垂れて拝礼する。こうしてシィシィマタ神、アカマタ神は村人の視界から消えていく。

シーラ橋の上では世持神を送り、神と別れる儀式が行われる。これが「別れ」である。この祭儀も村人以外の参観は許されていない。この時、「別れのユンタ」がうたわれる⁽²⁶⁾という。

シーラ橋での「わかれ」の祭儀が終わるとシィシィマタ、アカマタの両集団はウカウッカンへ赴き、そこでユンタをうたい、次はシィシィマタのヤームトゥヘ行き、そこでもユンタをうたう。さらにアカマタのヤームトゥヘ行き、そこでもユンタをうたう。これを3度繰り返すのだという。かつてはこれが6回で、前半の3回を済ませると休憩し、その後更に3回行い、全部が終わる頃は夜が明けたという。

4 アサギシキ・ヤームトゥギシキの儀礼過程と歌謡

プーリィ3日目の午前、シィシィマタのヤームトゥ、アカマタのヤームトゥでアサギシキ（朝儀式）が行われる。特にアカマタのヤームトゥではウイタビの者のお披露目が行われる。また、夕方からはフーマタのヤームトゥ、シィシィマタのヤームトゥそしてアカマタのヤームトゥをギラムヌたちが印旗を立てて巡回する祭儀が行われる他、ヤームトゥに客を招待して、豊穰を祝う豊年感謝の祝宴も開かれる。そして深夜には最後の「わかれ」がある。

①アサギシキの儀礼過程と歌謡

午前8時45分頃 富里家にアカマタ、シィシィマタ、2集団のウヤ、シジャ、ギラムヌ、マタタビ、ウイタビの全ヤマニンジュとフーマタ集団のウヤが参集する。次呂久氏（アカマタのタイショウ）が床の間に飾られたカザリィクピンの酒とルクジュを仲本氏に献進する（本来は「客」であること、また「士族」身分集団であるということでフーマタのウヤである山里氏になすべきだが、同氏が席を外していたため）。そしてこの2品が一同にまわる。次呂久氏と仲本氏の間で挨拶の取り交わしがあり、しばし歓談して、富里家を退出し、次呂久家に向かう。

午前9時頃 印旗を先頭に（シロ、アカの順）、一同で「ディイリヌユンタ」

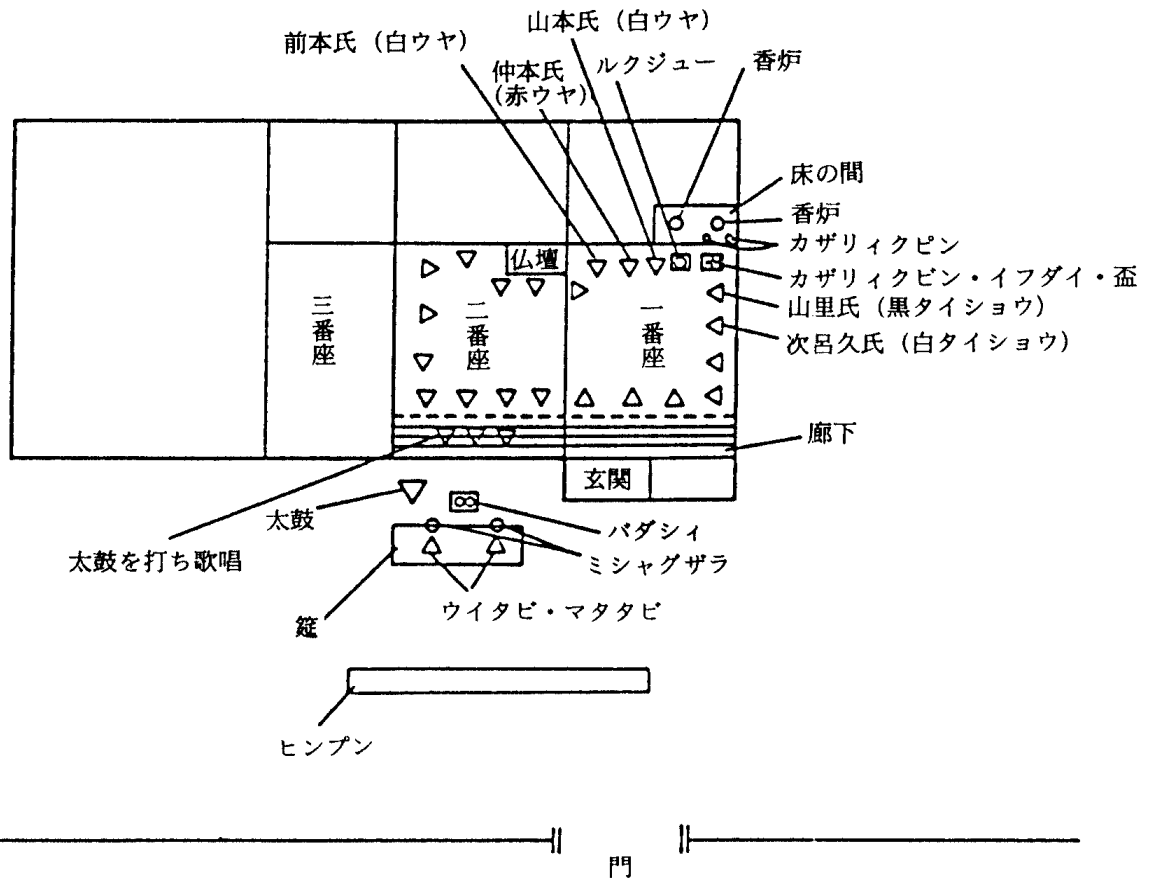
をうたいながら次呂久家まで歩く。同家の座敷に一同が着座すると、今度は仲本氏が主人の座に着き、山里氏にカザリィクピンの盃とルクジュを献進する。ウヤは上座（1番座）に着き、ギラムヌらは2番座に着く。

ウイタビの儀式のため庭に筵が敷かれ、稲藁で鉢巻が作られ、額に飾られるサンダンカの花が準備される。ギラムヌ2人が、筵に正座しているウイタビ（ウイタビのいない年はマタタビが）に藁鉢巻を締めてやったりして面倒をみてやる。準備が整ったところで、儀式を司るギラムヌ（マイダチィを勤めた2人）がウヤガタに対して「朝儀式の時分になりましたので、朝儀式を立派に勤めさせて下さい」と挨拶する。するとウヤの代表は「朝儀式というものは、私達が始めたものでもない。教えるということもないから、皆で立派にやりなさい」と返答する。すると2人はウイタビの方に行き「ウヤガタより朝儀式の許しをもらったのでこれから立派に勤めるように」と告げる。これでウイタビのチィトゥミが始まる。朝儀式におけるウヤとギラムヌその他との応答は方言でなされることになっている。

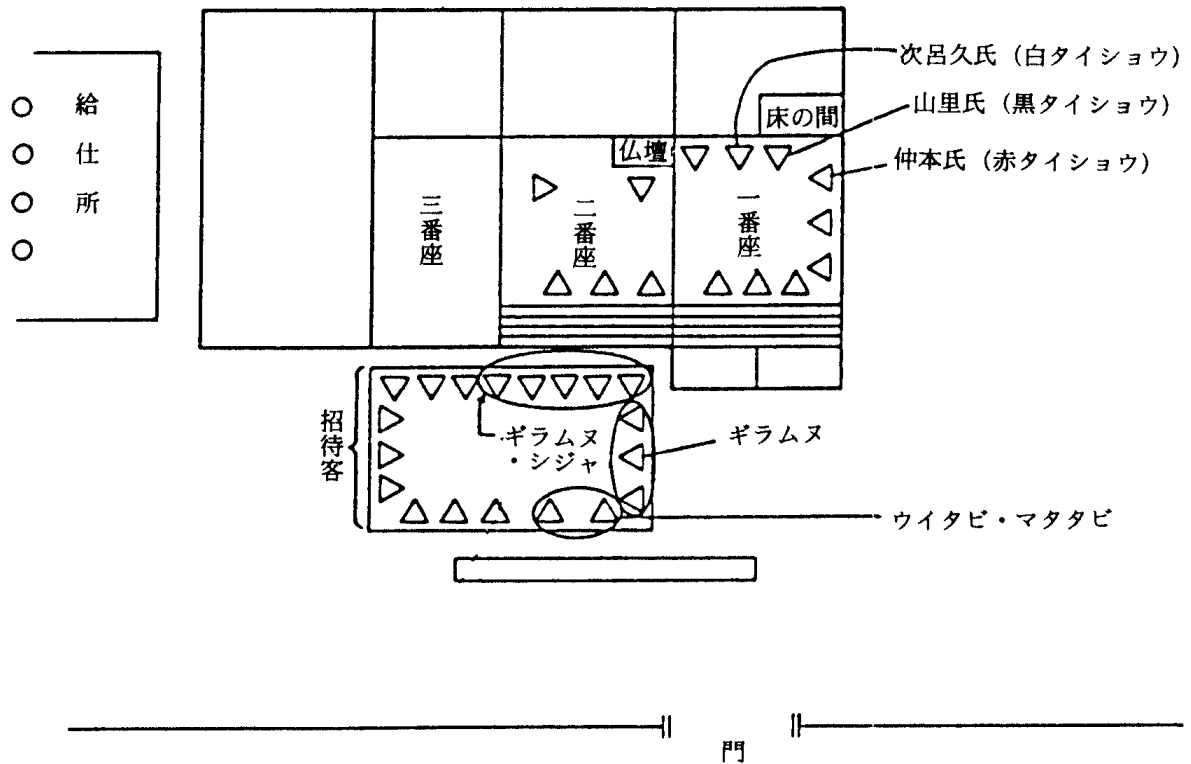
ウイタビのチィトゥミは、庭に正座し、ギラムヌやシジャ達のうたう歌に合わせて、両腕を左右後方まで一杯に伸ばし広げ、そして体の前方に運んで両手を打ち合わせるといふものである。これが、かつては青竹の上に正座させられるとか、延々と長時間にわたってチィトゥミをさせられるとか、という具合に、大変な苦行であったという。ウイタビの儀式の時には先ず「アカンマーブシィ」がうたわれ、続けて「シューラブシィ」がうたわれる（図9参照）。

アカンマーブシィ

- | | | | |
|---|---------|--------|------------------|
| 1 | あかんまぬヨー | いらすぎー | 赤馬の実に羨ましいことよ |
| | ハーリヌ | ヒヤルカヒー | （以下節、*印の箇所に入る） |
| | あしゆちゃぬヨ | | 足四つなる馬の |
| | ハイヤースーリ | | （以下節、**印の箇所に入る） |
| | どうきにやく | | 無上の喜ばしさよ |
| | ハーリヌ | ヒヤルカヒー | （以下節、***印の箇所に入る） |
| 2 | まりるかいヨー | あかんま * | 生まれ甲斐ある赤馬 |



〈図9 アサギシキ (アカマタのヤームトゥ) の時の図〉



〈図10 ヤームトゥギシキ (アカマタのヤームトゥ) の時の図〉

- | | | |
|---|-------------------|---------------|
| | しでいるかいヨ ** | 誕生した甲斐のある |
| | あしゆちゃヨー *** | 足四つなる馬 |
| 3 | うきいなーしゅーにヨー | 沖縄主〈国王〉に |
| | ぬずまり * | 望まれ |
| | しゅーぬまいにヨー ** | 主の前〈国王〉に |
| | みのーさりよ *** | 所望され |
| 4 | いらさにしゃ きゆぬひー ヨー * | 実に嬉しい今日の日 |
| | どうきいさにしゃ ** | 無上に嬉しい |
| | くがにひーヨ *** | 黄金の日 |
| 5 | ばんしいでいる きゆだら * | 私の生まれかわる今日である |
| | ばに むいるヨー ** | 羽の生える |
| | たきだら *** | ほどである |
| 6 | きゆ ゆわいヨー しゅらば * | 今日、祝いをしたら |
| | きゆ ふくら ** | 今日、誇り〈祝い〉を |
| | しゅらばヨー *** | したら |

シューラブシィ

- | | | |
|---|----------------|-----------------|
| 1 | なゆ しゃる ふあーぬどう | どんな娘が |
| | いか しゃる ふあーぬどう | 如何なる娘が |
| | ばー ゆみ なりくーさーヨー | 私の嫁になって来るの |
| | くり ゆみ なりくーさーヨー | これ〈私〉の嫁になって来るの |
| 二 | しいまじいまぬ | 島々ぬ |
| | むらむらぬ | 村々ぬ |
| | かいしゃーあすからヨー | 美しい子から（選んで嫁にする） |
| | しるさあすからヨー | 色白の子から（選んで嫁にする） |
| 三 | かいしゃゆ | 美しさを |
| | みらるんば | 何とする |
| | しるさゆ みらるんば | 白さを何とする |
| | きむどう きむやるヨ | 肝心こそが心である |

この両歌の歌唱法は交互歌唱法である。歌唱主体は一座のギラムヌ、シジャ。歌謡に伴う所作は、ウイタビによるチトウミである。

チトウミの後はウイタビがミシャグザラのミシャグを戴く儀式がある。この時も歌謡がうたわれる。ウイタビがいる時には「ママリ」がうたわれる。⁽⁷⁾ウイタビがいない時には「ウブミシャグ」がうたわれる。

ママリ

1 みゆすいぬ うんさく	根覆いの御神酒
ばゆしばどう ゆわなうる	囃してこそ世は稔る
うやきなかざらぬ うんさく	富貴の中皿の御神酒
ぱるみんがし	ぱるみんがして〈未詳〉
みよやいしょーり	お上がりください
ままりや たーるが ままり	恋人は、誰が恋人
じーりが ままり	何れが恋人
いざば しいかし	言ったら聞かせろよ
ゆまば しいかし	話したら聞かせろよ
〔ター ママリ ニラ シィサリ〕	〔どなたがママリですか。もし〕

歌唱法は斉唱法で、歌唱主体は一座のギラムヌ、シジャら。歌謡に伴う儀礼的な所作は、ウイタビがミシャグザラを両手で捧げ持って、歌に合わせて左右に大きく振るもので、下記の「ウブミシャグ」の所作と同じである。後半以降の「ままりや たーるが ままり じーりが ままり いざば しいかし ゆまば しいかし」とうたい終え、「ター ママリ ニラ シィサリ」という問いかけがあったところで、ウイタビは立ち上がり、「ママリヤ ○○ユー シィサリ」（ママリは○○です。もし。）と自分の意中の人の名を大きな声で告げる。マイダチのギラムヌはこれを受けてウヤの方に向かい、「ママリヤ ○○ユー シィサリ」と伝える。ウヤが「イイ ママリ」（良いママリ）だと認めると儀式は終りとなる。しかし、ママリの女性が年齢などで不相応の場合は不合格が宣言され、すべてやりなおしとなる。一座の人々の面前でのことであり、かつてはこの時に唱え上げた女性と結婚した人もあったという。

ウブミシャグ

- | | | |
|---|--|---|
| 1 | なうるゆぬ
みきりゆーぬ うんさく | 稔る世の
実入る世の御神酒 |
| 2 | ちぬざらに
ゆなうしいに んでいちいきいとう | 角皿に
世直しに満たしいれて |
| 3 | ぱるみんがし
んまんまとう
かばかばとう みよやいしょーり | ぱるみんがし
美味しい美味いと
香ばしい香ばしいと お上がりく
ださい |
| 4 | びょーし びょーし
ぬるとう ふたつ
まぬ かつかつよ
まぬ かつかつよ しいさり | 囃せよ 囃せよ
ぬると二つ
まぬ かつかつよ
まぬ かつかつよ と申し上げます。 |

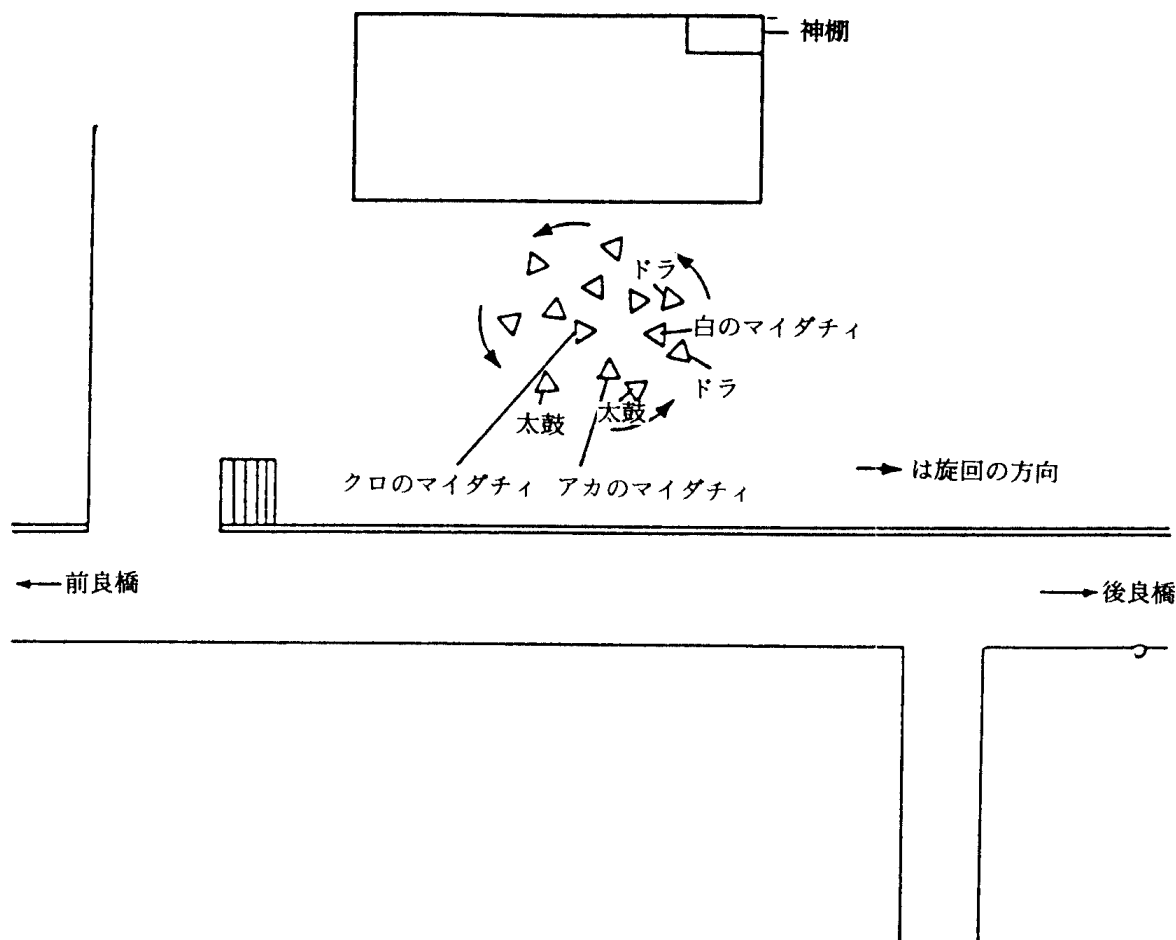
歌唱法は斉唱法で、歌唱主体は一座のギラムヌ、シジャラ。歌謡に伴う儀礼的な所作は、ウイタビがミシャグザラを両手で捧げ持って、歌に合わせて左右に大きく振るものである。屋内の座敷では、庭のウイタビに相對して2人の先輩が同様にミシャグザラを左右に大きくふるが、これはウイタビに所作を教示するためという。

これらのチイトゥミが終わって進行役のギラムヌは「今日の朝儀式も先輩方がなさってくれて立派に勤められました」とウヤガタに感謝の報告をする。するとウヤは「今日の朝儀式もちゃんと勤められ、今後も健康に注意して勤めるように。おりこうさん」とねぎらう。ギラムヌはウイタビに向かって「朝儀式も終わって、ウヤガタからお褒めの言葉も戴いた。御苦勞であった」と告げる。するとウイタビは「ヤーグリ ホッホ」と大声で応答し、終了となる。

②ヤームトゥギシキの儀礼過程と歌謡

a 「ミーフミ」の儀礼過程と歌謡

3日目の夕方、ギラムヌ達が各ヤームトゥを廻る祭儀である。各ムトゥを



〈図11 フーマタのヤームトゥでのミーフミの時の図〉

ギラムヌ達が廻るのを「メー（ミー）フムン（庭を踏む）」という（それで仮にこの祭儀の名をミーフミと称しておく）。

午後6時頃 ギラムヌ、ウイタビらがアカマタのヤームトゥに集合する。クロの集団の準備が整ったところでフーマタの方から案内が来る。すると、印旗を持ったマイダチ(シロ、アカ、クロの順)を先頭に、フーマタのヤームトゥへ移動する。その時「ディイリヌユンタ」をうたう。フーマタのヤームトゥに着くと、マイダチは印旗の竿をしっかりと両手で捧げ持って、鼎型の陣形に立ち、その周囲に他のギラムヌやヤームトゥに参集していたシジャ達が立って「クムラユンタ」をうたう。いずれも本来は反復歌唱法である（現在は交互歌唱法となっている）。太鼓とドラに合わせてうたうが、途中(第9節)から転調し、テンポの早い曲となる。この時から太鼓とドラは乱打され、マイダチはリズムに合わせて印旗の竿を垂直方向に突き上げ、突き上

げする。足は一所で足踏み状態で軽快に踏む。ユンタの歌唱者も同様にリズムに合わせ一所で足踏みをする。太鼓とドラの打ち手他は反時計回りに円陣行進をする(図11参照)。こうして最後の歌詞までうたい終わると、次のヤームトゥ(富里家)へ移動となる。

午後6時40分頃 シィシィマタのヤームトゥである富里家への道行となる。「ディイリヌユンタ」をうたいつつ行く。同家の門に入る時にはあらためて、「ディイリヌユンタ」の一番の歌詞からうたい直す。同家でもフーマタのヤームトゥでの歌唱と同様な陣形でユンタをうたい、以下同様に展開し、円陣行進となる。第8節までうたったところでテンポが早くなり、「クムラユンタ」に変わる。歌唱法、歌唱主体、歌謡に伴う儀礼的所作などはフーマタのヤームトゥと同じ。

午後7時頃 富里家からアカマタのヤームトゥである次呂久家への道行となる。「ディイリヌユンタ」をうたいつつ行く。門から庭に入り、フーマタのヤームトゥと同様な陣形となってユンタをうたうが、途中(第9節)から「ウムトゥバナリ」に変わる(現在は第6節までうたって、間をとばしてすぐ「ウムトゥバナリ」へ移っている)。そして最後はテンポが速くなり、円陣行進となって、終了する。

こうしてミーフミの1回目が終了する(2回目も同様に行う。2回目については記述を省略する)。この後は招待客を交えての宴会となる。

現在、ヤームトゥギシキの宴会は3つのヤームトゥの持ち回り制となっている。かつてはそれぞれのヤームトゥで独立して行っていたという。人口の減少、すなわちヤマニンジュの減少などがあって、現在の形になったのだという。

ヤームトゥギシキの宴会の式次第はごく一般的である。1993年を例にとると、1 司会の挨拶 2 公民館長挨拶 3 乾杯の音頭 4 お祝いの挨拶と続き、あとは村の人々も交えての歌謡の掛け合いとなる。その順番もある程度一定しているようで、まず最初は「アカンマー」「シューラブシィ」で始まる。その後は、ウイタビのユングトゥ、ギラムヌのユングトゥ、「ヤーラーヨー」、ユングトゥ(キョングインと称した)、「ミブキ」、「ウイタビヌユンタ」とうたい継いでいった。かつては次から次と歌が出て、明け方まで続いたという。

そんな時のとじめの歌は「鳩間節」であったという（それで古見では徹夜をすることをハトゥマブシイというそうである）。

この歌の掛け合いは各ヤームトゥの勢いをあらわす恰好の場で、ブナチィ（乙女）たちは着飾ってやって来て、それぞれの家の所属するムトゥの色の鉢巻きを締め、太鼓を打ち鳴らし歌に加わったという。そして、ミーフミに出発する印旗のもとに集まってギラムヌらを囃したたものだという。このブナチィの応援の依頼は、ブナチィカカリ（ナカシジャが担当）がわざわざやって来て行ったという。ヤームトゥギシキの宴会が終了すると2回目のミーフミが行われる。これが終わる頃は午後11時をまわる。その後、3回目のミーフミが行なわれる。3回目のミーフミではフーマタのヤームトゥでは「ミツバナリ」をうたい、アカマタ・シィシィマタのムトゥでも最後には「ミツバナリ」をうたう。その後「わかれ」が行なわれる。この「わかれ」の祭儀も見学は許されていない。

以下に、ヤームトゥギシキの祝宴にうたわれる歌謡を掲げる。

ヤーラーヨー

- | | | |
|----|-----------------|--------------------|
| 1 | ヤーラーヨー | ヤーラーヨー |
| | きゆぬびば しらびょーり | 今日の日を調べまして |
| | ヤーラーヨー ヤーラーヨー | サーサー(以下節、*印の箇所に入る) |
| 2 | くがにびば いらびょーり * | 黄金の日を選びまして |
| 3 | かんぬまいに しやりてい * | 神様に申し上げて |
| 4 | ぬしいぬまいに うぬぎてい * | 主の前に申し上げて |
| 5 | やいぬゆば にがよーり * | 来年の世を願いまして |
| 6 | くなつゆば ていずよーり * | 来る夏の世を手摩り〈願い〉まして |
| 7 | やいにゆぬ なうらば * | 来年の世が稔りましたら |
| 8 | くなつゆぬ みきらば * | 来る夏の世が稔りましたら |
| 9 | いしみきり しゆらば * | 石の実入りをしましたら |
| 10 | かにみきり しゆらば * | 金の実入りをしましたら |
| 11 | いしみきり しぬかふ * | 石の実入りをする果報 |

12	かにみきり	しぬかふ	*	金の実入りをする果報
13	ないしゆし	しゆらば	*	ナイシ寄せをいたしましたら
14	しくらなみ	しゆらば	*	シクラ並みをいたしましたら
15	ないしゆし	しぬかふ	*	ナイシ寄せをする果報
16	しくらなみ	しぬかふ	*	シクラ並みをする果報
17	たるがたる	とうゆまり	*	誰々が鳴響まれる
18	じりがじり	なとうらり	*	いずれいずれが、名を取られる
19	かんぬまいぬ	とうゆまり	*	神様が鳴響まれる
20	ぬしいぬまいぬ	なとうらり	*	主様が名を取られる
21	かんぬまいぬ	とうみやまり	*	神様の後には
22	ぬしぬまいぬ	とうみやまり	*	主様の後には
23	たるがたる	とうゆまり	*	誰々が鳴響まれる
24	じりがじり	なとうらり	*	いずれいずれが、名を取られる
25	ちいかさまいぬ	とうゆまり	*	司様が鳴響まれる
26	ていじりしゆぬ	なとうらり	*	手摩り主が名を取られる
27	ちいかさまいぬ	とうみやまり	*	司様の後には
28	ていじりしゆぬ	とうみやまり	*	手摩り主の後には
29	たるがたる	とうゆまり	*	誰々が鳴響まれる
30	じりがじり	なとうらり	*	いずれいずれが、名を取られる
31	ゆむちいまいぬ	とうゆまり	*	世持ち役様が鳴響まれる
32	しまむちいぬ	なとうらり	*	島持ち役様が名を取られる
33	ゆむちいまいぬ	とうみやまり	*	世持ち役様の後には
34	しまむちいぬ	とうみやまり	*	島持ち役様の後には
35	たるがたる	とうゆまり	*	誰々が鳴響まれる
36	じりがじり	なとうらり	*	いずれいずれが、名を取られる
37	ぎらむぬぬ	とうゆまり	*	ギラムヌが鳴響まれる
38	さゆかにぬ	なとうらり	*	サユカニが名を取られる
39	ぎらむぬぬ	とうみやまり	*	ギラムヌの後には
40	さゆかにぬ	とうみやまり	*	サユカニの後には

歌唱主体は一座の人々全員で、歌唱法は一同が甲と乙に分かれ、一節ごとに分担を交互に変えていく交互歌唱法である。歌謡に伴う儀礼的所作として、ウイタビ、マタタビらのチイトウミが行われる。

ミブキ

- | | | |
|----|-------------------|-------------------|
| 1 | きゆぬ ぴいば いらびよーり | 今日の日を選びまして |
| | くがにぴいば しらびよーり | 黄金の日を調べまして |
| | ウヤキ スヌ ミブギ スリュ | ミブギ |
| | スリュ ミブギ ウヤキ スヌ | ミブギ(以下節、*印の箇所に入る) |
| 2 | かんぬまいに しやりてい | 神様に申し上げて |
| | ぬしぬまいに うぬきてい * | 主の前に申し上げて |
| 3 | やいにゆば ながよーり | 来年の世を願ひまして |
| | くなちいゆーば ていずりよーり * | 来る夏の世を手摩り〈願ひ〉まして |
| 4 | やいにゆーぬ なうらば | 来年の世が稔りましたら |
| | くなちいゆーぬ みきらば * | 来る夏の世が稔りましたら |
| 5 | いしみきり しゆらば | 石の実入りをいたしましたら |
| | かにみきり しゆらば * | 金の実入りをいたしましたら |
| 6 | いしみきり しぬかふ | 石の実入りをする果報 |
| | かにみきり しぬかふ * | 金の実入りをする果報 |
| 7 | ないしゆし しゆらば | ナイシ寄せをいたしましたら |
| | しくらなみ しゆらば * | シクラ並みをいたしましたら |
| 8 | ないしゆし しぬかふ | ナイシ寄せをする果報 |
| | しくらなみ しぬかふ * | シクラ並みをする果報 |
| 9 | たるがたる とうゆまり | 誰々が鳴響まれる |
| | じりがじり なとうらり * | いずれいずれが、名を取られる |
| 10 | かんぬまいぬ とうゆまり | 神様が鳴響まれる |
| | ていじいりしゆぬ とうゆまり * | 手摩り主が鳴響まれる |
| 11 | かんぬまいぬ とうみやまり | 神様の後には |
| | ていじいりしゆぬ とうみやまり * | 手摩り主の後には |

- | | | |
|----|-------------------------------------|----------------------------|
| 12 | たるがたる とうゆまり
じりがじり なとうらり * | 誰々が鳴響まれる
いずれいずれが、名を取られる |
| 13 | ちいかさまい とうゆまり
ていじいりしゆぬ なとうらり * | 司様が鳴響まれる
手摩り主が名を取られる |
| 14 | ちいかさまいぬ とうみゃまり
ていじいりしゆぬ とうみゃまり * | 司様の後には
手摩り主の後には |
| 15 | たるがたる とうゆまり
じりがじり なとうらり * | 誰々が鳴響まれる
いずれいずれが、名を取られる |
| 16 | ゆむちいまいぬ とうゆまり
しいまむちいぬ なとうらり * | 世持役様が鳴響まれる
島持役様が名を取られる |
| 17 | ゆむちいまいぬ とうみゃまり
しいまむちいぬ とうみゃまり * | 世持役様の後には
島持役様の後には |
| 18 | たるがたる とうゆまり
じりがじり なとうらり * | 誰々が鳴響まれる
いずれいずれが、名を取られる |
| 19 | ぎらむぬぬ とうゆまり
さゆかにぬ なとうらり * | ギラムヌが鳴響まれる
サユカニが、名を取られる |
| 20 | ぎらむぬぬ とうみゃまり
さゆかにぬ とうみゃまり * | ギラムヌの後には
サユカニの後には |

歌唱主体、歌唱法、歌謡に伴う儀礼的所作は「ヤーラーヨー」と同じ。

ウイタビヌウタ⁽²⁸⁾

- | | | |
|---|--|------------------------------------|
| 1 | きゆぬびば いらびよーり
くがにびば しらびよーり
ハーリヌチンダラ チンダラヨー (以下節、*印の箇所に入る) | 今日の日を選びまして
黄金の日を調べまして |
| 2 | かんぬまいに しやりてい
ぬしぬまいに うぬぎてい * | 神様に申し上げて
主の前に申し上げて |
| 3 | やいにゆば ながよーり
くなちいゆば
ていじいりよーり * | 来年の世を願ひまして
来る夏の
世を手摩り〈願ひ〉まして |

- | | | |
|----|------------------------------------|--------------------------------|
| 4 | やいぬゆぬ なうらば
く なちいゆぬ みきらば * | 来年の世が稔りましたら
来る夏の世が稔りましたら |
| 5 | いしみきり しゆらば
かにみきり しゆらば * | 石の実入りをいたしましたら
金の実入りをいたしましたら |
| 6 | いしみきり しぬ かふー
かにみきり しぬ かふー * | 石の実入りをする果報
金の実入りをする果報 |
| 7 | ないしゆし しゆらば
しくらなみ しゆらば * | ナイシ寄せをいたしましたら
シラク並みをいたしましたら |
| 8 | ないしゆし しぬ かふ
しくらなみ しぬ かふ * | ナイシ寄せをする果報
シクラ並みをする果報 |
| 9 | たるがたる とうゆまり
じりがじり なとうらり * | 誰々が鳴響まれる
いずれいずれが、名を取られる |
| 10 | かんぬまいぬ とうゆまり
ぬしぬまいぬ なとうらり * | 神様が鳴響まれる
主の前が鳴響まれる |
| 11 | かんぬまいぬ とうみやまり
ぬしぬまいぬ とうみやまり * | 神様の後には
主の前の後には |
| 12 | たるがたる とうゆまり
じりがじり なとうらり * | 誰々が鳴響まれる
いずれいずれが、名を取られる |
| | ジュージュ（この囃子は随時入れられる） | |
| 13 | ちいかさまいぬ とうゆまり
ていじりしゆぬ なとうらり * | 司様が鳴響まれる
手摩り主が名を取られる |
| 14 | ちいかさまいぬ とうみやまり
ていじりしゆぬ とうみやまり * | 司様の後には
手摩り主の後には |
| 15 | たるがたる とうゆまり
じりがじり なとうらり * | 誰々が鳴響まれる
いずれいずれが、名を取られる |
| 16 | ゆむちいまいぬ とうゆまり
しいまむちいぬ なとうらり * | 世持役様が鳴響まれる
島持役様が名を取られる |
| 17 | ゆむちいまいぬ とうみやまに
しいまむちいぬ とうみやまに * | 世持役様の後には
島持役様の後には |
| 18 | たるがたる とうゆまり | 誰々が鳴響まれる |

- | | | |
|----|-----------------|----------------|
| | じりがじり なとうらり * | いずれいずれが、名を取られる |
| 19 | ぎらむぬぬ とうゆまり | ギラムヌが鳴響まれる |
| | さゆかにぬ なとうらり * | サユカニが名を取られる |
| 20 | ぎらむぬぬ とうみやまに | ギラムヌの後には |
| | さゆかにぬ とうみやまに * | サユカニの後には |
| 21 | ういたびぬ ぷりむぬ | 初旅の馬鹿者は |
| | あらたびぬ ましむぬ * | 新旅のウス馬鹿は |
| 22 | くとうしやりばどう | 今年だから |
| | ばな ぷりだる | ウス馬鹿と言われる |
| | やいにからや | 来年からは |
| | がらまきとうらすんどー * | うんと頑張ってみせよう |
| 23 | いぎば いじかいし | 言えば言い返す。 |
| | ししいんな ういたび | 知っているか初旅よ |
| | ゆみば ゆみかいし | 誦めば誦み返す。 |
| | ししいんな あらたび * | 知っているか新旅よ |
| 24 | いぎば いじみりや | 言うならば言えよ、 |
| | いじかいしとうらさ | 言い返してみせよう |
| | ゆまば ゆみみりや | 誦むならば誦めよ、 |
| | ゆみかいしとうらさ * | 誦み返してみせよう |
| 25 | ういたびぬ みんな みるから | 初旅の目ん玉を見てみると |
| | あみふりがらさぬ | 雨にうたれた鳥の |
| | みんな みるそんな * | 目ん玉をみるようだ |
| 26 | びぎりやまぬ みんな みるから | 兄さんの目ん玉を見てみると |
| | あみふり やぎわーぬ | 雨にうたれた痩せ豚の |
| | みんな みるそんな * | 目ん玉をみるようだ |
| 27 | ふしいぶるうちいおいや | フズル風呂敷は |
| | なゆしゃる | 如何なる |
| | むぬやりやどう | 物だから |
| | みやらび からまじいば | 乙女の頭を包み |
| | かいかくしよーる * | 隠すのでしょ |

- 28 ヤー びぎりやまーや
なゆしゃる むぬやりやどう
ふしいぶるうちいおいとう
りんきば むっちょーる *
- 29 くんずみすでいなや
なゆしゃる むぬやりやどう
みやらび ゆむどうば
かいかくしょーる *
- 30 ヤー びぎりやまーや
なゆしゃる むぬやりやどう
くんずみすでいなとう
りんきば むっちょーる *
- 31 ふしいぶるかかanya
なゆしゃる むぬやりやどう
みやらび やくしいば
かいかくしょーる *
- 32 ヤー びぎりやまーや
なゆしゃる むぬやりやどう
ふしいぶるかかanton
りんきば むっちょーる *
- 33 ヤー ばたいりまいちゃや
なゆしゃる むぬやりやどう
みやらび ぴさがば
かいかくしょーる *
- 34 ヤー びぎりやまーや
なゆしゃる むぬやりやどう
ばたいりまいちゃとう
りんきば むっちょーる *
- ヤー 兄さんは
如何なる方だから
フズル風呂敷に
やきもちを 焼くのでしょう
紺染めのスディナは
如何なる物だから
乙女の美しい体を
包み隠すのでしょう
ヤー 兄さんは
如何なる 方だから
紺染めのスディナに
やきもちを 焼くのでしょう
フスブル下裳は
如何なる物だから
乙女の肢体を
包み隠すのでしょう
ヤー 兄さんは
如何なる 方だから
フスブル下裳に
やきもちを 焼くのでしょう
ヤー 綿入りのモッコフンドシは
如何なる 物だから
乙女の陰部を
包み隠すのでしょう
ヤー 兄さんは
如何なる 方だから
綿入りのモッコフンドシに
やきもちを 焼くのでしょう

歌唱主体は一座の人々。一同が甲（ウイタビのグループ）と乙（ギラムヌ

のグループ)に分かれ、ウイタビの言葉としてうたわれる節は甲のグループが、ギラムヌの言葉としてうたわれる節は乙がうたう。交互歌唱法。歌謡に伴う儀礼的所作はウイタビらのチイトゥミがある。

これらの歌謡の歌唱の合間々々に祭祀集団を構成する男性やチィカサが一人ずつ、一座の中で立ってキョングンをする。キョングン(狂言の意)と言っているが、八重山一般でユングトゥと称しているものに類するものである。身ぶりをともないながら、一人で唱える。以下に現在演じられている三篇を掲げる。

キョングン (1)

○トーザイ トーザイ	東西 東西
アンタヌ ヤマガラ	東方の山から
インタヌ ヤママデ ^①	西方の山まで
シーチキル ウシェ ^②	仕付けてある牛は
ターウシィデ アイタリバ ^③	誰の牛かと言うと
バー ウシ ^④	私の牛
パイヌ ユーパイ ^⑤	脚の四脚
キザヌ ヤーキザガギ ^⑥	蹄の八蹄で
フンタリ キンタリ ^⑦ シ	踏みこなし もみこなして
チィクリル マイヤ ^⑧	作ってある米は
ター マイティ ^⑨ イーバ	誰の米かと言うと
バーマイ ^⑩	私の米
ピトゥムトゥニ ^⑪ カリバ	一株と刈ると
イチマングク	一万石
フタムトゥニ ^⑫ カリバ	二株と刈ると
ニマングク	二万石
ミームトゥニ ^⑬ カリバ	三株と刈ると
サンピカリユ ^⑭	算光りですよ
シィサリ	申し上げました。

- ① 「インタヌ ヤマカラ アンタヌ ヤママディ」とも唱えられる。
- ② 「チリトール ウシ」(列れている牛)とも唱えられる。
- ③ 「ターガ ウシデ イータリバ」(誰の牛かと言うと)とも唱えられる。
- ④ 「ワンガ ウシ」(私の牛)とも唱えられる。
- ⑤ 「パンヌ ユーパン」(脚の四脚)とも唱えられる。
- ⑥ 「ヤーキザシ」(八蹄で)とも唱えられる。
- ⑦ 「ケンタリ」とも唱えられる。
- ⑧ 「チクテール クメー」(作ってある米は)とも唱えられる。
- ⑨ 「ターガ クミディ イータリバ」(誰の米かと言うと)とも唱えられる。
- ⑩ 「ワンガ クミ」(私の米)とも唱えられる。
- ⑪～⑬「～ムトゥディ」(～株)とも唱えられる。
- ⑭ 「～ディユー」(～ですよ)とも唱えられる。

キョングン (2)

○トーザイ トーザイ	東西 東西
アンタヌ ピーカラ	東方の干瀬から
インタヌ ピーマディ	西方の干瀬まで
チリトール フクルベー	列れているフクルベー魚は
ターガ フクルベーティ イータリバ	誰のフクルベー魚かと言うと
バー フクルベー	私のフクルベー魚
ミーユ ミー	目はよ 目
ハナユー ハナ	鼻はよ 鼻
グフグフティユー	グフグフとよ
シィサリ	申し上げました。

キョングン (3)

○トーザイ トーザイ	東西 東西
キューヌ ヒヌ サニシャ	今日の日の嬉しさよ
クガニヒヌ サニシャ	黄金日の嬉しさよ
ウムタクトゥ カナシ	思った事を叶わせ

ニガタクトゥ カナシ
 トーザイ ナンボク
 メデタイユー
 シィサリ

願った事を叶わせ
 東西南北
 めでたいことです
 申し上げました。

三、まとめにかえて

ここで古見のプーリィの祭祀と歌謡について宮良高弘氏、喜舎場永珣氏の論文に収録された歌謡についてふれてみたい。

宮良氏の論文には1〔アカマタ渡来伝説をうたったユンタ〕 2古見邑ユンタ（ウツカン巡りの道行の時か） 3舟漕ユンタ（A）（舟漕ぎの時） 4舟漕ユンタ（B）（舟漕ぎの時） 5通^{とう}のユンタ（アカマタ、シィシィマタの両神がウカウツカンの前を通り、村を訪れる時） 6出入^{でいりぬ}のユンタ（トゥニムトゥの門に入る時に） 7ウムトゥ離りユンタ（村での祭儀を終えたアカマタ、シィシィマタの両神がピィニシィウツカンで祭礼を受ける時）、8ママリヌユンタ（アサギシキでウイタビのチィトゥミの時） 9〔ウイタビヌユンタ〕（断片。歌唱の場について記述なし）と、九つの歌謡の歌詞が収録されている。

喜舎場氏の論文には、1古見村の赤マターユンタ（本来の名称は「トゥーリィヌユンタ」という。ウンプーリィの日、ウカウツカンでアカ、シロのヤマニンジュがうたう） 2古見邑ユンタ（ウンプーリィの日、ウカウツカンでアカ、シロのヤマニンジュがうたうか。記述なし） 3「ディイリヌユンタ」（フーマタのムトゥでフーマタ神を迎える時） 4別^{バガ}リヌユンタ（フーマタ神がシンザイで別れる時）と四つの歌謡の歌詞が収録されている。

両氏の収集されたこれらの歌謡のなかには、今回筆者が収集したものとは別のものがある。これらは調査を許されない部分の歌謡で、貴重な資料である。すなわち、ウンプーリィの夜の祭儀の場でうたわれるという①赤マターユンタ（両氏の資料の1番目の歌謡）、トゥーピィの②フナクイユンタ（B）、③通のユンタである。

これらの歌謡も充当しながら、古見のプーリィにおける祭祀と歌謡の関わ

りを整理してみよう。

第1日目 ウンプーリィ——①「ミツバナリ」(ミチャーリ・カニマウツカンでアカ、シロのヤマニンジュがうたう。シタヂィウツカンでクロ、アカ、シロのヤマニンジュがうたう)。②クンムラユンタ(ウツカン巡りの時の道行で、アカ、シロ、クロのヤマニンジュがうたう)。③「ウムトゥバナリ」(ウカウツカンでアカ、シロ、クロのヤマニンジュがうたう)。④「クンムラユンタ」(ピニシィ・キダスクウツカンでシロ、クロ、アカのヤマニンジュがうたう)。⑤トゥーリィヌユンタ(ウンプーリィの日、ウカウツカンでアカ、シロのヤマニンジュがうたう)。

第2日目 トゥーピィ——①「フナクイユンタ」(フナクイの時、シロのヤマニンジュがうたう)。②「舟漕ユンタ (B)」(フナクイの時)。③「トゥーリィヌユンタ」(アカマタ、シィシィマタの両神がウカウツカンの前を通り、村を訪れる時ヤマニンジュがうたう)。④「ディイリヌユンタ」(アカマタ、シィシィマタの両神がトゥニムトゥの門に入る時ヤマニンジュがうたう)。⑤「バガリヌユンタ」(アカマタ、シィシィマタの両神を送って、シーラ橋の上の座でアカ、シロのヤマニンジュがうたう。フーマタ神を送って、シンザイでクロのヤマニンジュがうたう)。

第3日目 ヤームトゥギシキ——①「アカンマーブシィ」、②「シューラブシ」、③「ママリヌユンタ」、④「ウフミシャギィ」(ウイタビのアサギシキの時、アサギシキを執行するギラムヌが主となつてうたう)。⑤「ディイリヌユンタ」(ヤームトゥギシキのミーフミの時の道行にアカ、シロ、クロのギラムヌらがうたう)。⑥「ミツバナリ」(ミーフミの時、フーマタのヤームトゥで、アカ、シロ、クロのギラムヌらがうたう)。⑦「クンムラユンタ」(ミーフミの時、シィシィマタのヤームトゥで、アカ、シロ、クロのギラムヌらがうたう)。⑧「ウムトゥバナリ」(ミーフミの時、アカマタのヤームトゥで、アカ、シロ、クロのギラムヌらがうたう)。⑨「アカンマーブシィ」、⑩「シューラブシ」、⑪「ヤーラーヨー」、⑫「ミブキ」、⑬「ウイタビヌユンタ」(ヤームトゥギシキの祝宴で、参加者一同でうたう)。その他、ユングトゥ三首。

歌唱主体は、全ての歌謡がヤマニンジュ集団の成員である。これが、アカ、シロ、クロのそれぞれの関係で互いに歌唱主体となったり、歌唱主体でなかつ

たりしている。これはプーリィの祭祀歌謡が祭祀の場と深く結びつき、歌唱主体を制限することがあることを示している。これは祭祀集団がどのような歌謡を所有するか、という興味深い問題をも提供している。

歌唱法としては、現在は交互歌唱法と分担歌唱法の二種となっているが、神歌のあるものは本来は反復歌唱法であった。反復歌唱法から交互歌唱法への移行がみられるのである。これを古見のプーリィの祭祀歌謡の歌唱法の特徴として挙げることができるだろう。

歌謡に伴う儀礼的所作としては、種類が少ない。特徴的なものとしてはアサギシキの時の「ママリヌユンタ」「ウフミシャグ」に合わせて、ウイタビがなすチトウミを挙げるができる。この所作はヤームトゥギシキの祝宴でも度々行われ、プーリィの歌謡につきものの所作といってよいだろう。ほかにはユングトゥが所作を伴うものであることを付言しておく。

以上の通りである。調査の許されない部分もあるわけであるから、もちろん、これでプーリィにおけるすべての歌謡というわけにはいかない。しかし、実に多数の歌謡が、アカ、シロ、クロという3柱の世持神を祀るためにうたわれていることがみてとれるだろう。また、本稿では私が直に収集し、文字におこした歌謡資料のうち、「神歌」と位置づけられる歌謡は掲載していない。これはアカマタ祭祀にとって、これらの「神歌」は秘伝とされるべきものであり、その歌唱そのものが「秘儀」とされている、という成員の意識に拠るものである。このこともふくめて、歌謡が祭祀を構成する重要な要素としてあることを理解してもらいたい。

これらの歌謡の内容と、それぞれの歌謡のうたわれる場の問題、すなわち歌謡内容と祭祀におけるその機能の問題についても、かなり見えるものがありそうである。祭祀歌謡論の展開のためには、誠に貴重な資料群と言って良いだろう。この方面の検討は今後の課題である。

以上は、1990年から1994年までの筆者の古見調査ノートによるレポートである。筆者は幸い古見の人々のご理解を戴いて、ウンプーリィとトゥーピィのフナクイ、「別れ」を除くヤームトゥギシキの大部分の調査を許して戴いている。今このような形で本稿をまとめたが、これをこの間の調査の報告としたい。

今回のレポートをまとめながら感じたことは、八重山の中でこの祭祀ほど歌謡と祭祀が深く結びついた例はないのではないかと、ということであった。歌謡と祭祀集団の結び付き、歌謡と個々の祭儀の関わりなど、じつに興味深いものがある。アカマタ祭祀の伝承と保存という観点からも、この祭祀の諸面について可能な限り研究の手を伸ばしたいと思っている。本稿はそのための資料である。

喜舎場永珣氏の研究や宮良高弘氏の研究には無い視点、すなわち、歌謡も祭祀を構成する1つの重要な要素であるという考え方、歌謡の内容に祭祀のテーマが雄弁に物語られているという文学研究の立場から、古見のプーリィの歌謡の全体像を洗い出していくことが、当面の課題である。

最後に私の調査に温かいご理解を下さっている古見の方々に厚くお礼を申し上げます。

注

- (1) 宮良高弘「八重山群島におけるいわゆる秘密結社について」『民俗学研究』27巻1号 1963年(『叢書わが沖縄 第5巻 沖縄学の課題』1972年 木耳社刊を参照した)。
- (2) 宮良高弘「『黒マタ・白マタ・赤マタ』の祭祀—西表島古見の豊年祭」『札幌大学紀要教養部論集』1集 1968年。
- (3) 宮良高弘「八重山のいわゆる秘密結社」『南島史論——富村真演教授還暦記念論文集』(1972年)。
- (4) 宮良高弘「アカマタ・クロマタの祭祀組織」『沖縄の民族学的研究——民族社会と世界像——』(1972年)。
- (5) 喜舎場永珣「アカマター神事に関する覚書」『八重山民俗誌』(1977年 沖縄タイムス社刊)。
- (6) 注(5)論文参照。
- (7) 遊行鬼「アカマターの村——西表島・古見拾遺記——」『季刊柳田国男研究』1号 (1973年)。
- (8) 柳田国男『海上の道』(『定本柳田国男集』第1巻 1968年 筑摩書房刊)。
- (9) 宮城栄昌・高宮広衛編『沖縄歴史地図』(考古篇) (1983年 柏書房刊) 38

頁参照。

- (10) 笹森儀助『南島探験』（東喜望校注『南島探験 1 琉球漫遊記』東洋文庫 1982年 平凡社刊）211頁参照。
- (11) 現在、加入者となれる条件は、1. 両親が古見出身者である。2. 片方の親が古見出身者である。3. 古見出身の女性と結婚し、ヤマニンジュがその構成員として相応しい人格の持ち主であると認めた場合。4. 本来、血縁関係、婚姻関係などで古見となんの関わりも持たないが、古見に移住、定着して、ヤマニンジュがその構成員として相応しい人格の持ち主であると認めた場合、という形になっている。本来は1の条件に合致する者のみが構成員たりえたのが、古見の社会構造の変化に従って、2→3→4と加入の条件が緩やかになってきている。
- (12) 注(1)論文208～233頁参照。
- (13) 『八重山島諸記帳』（成立年不明。18世紀初期の成立か。『南島』第1集（1940年。本稿では1976年再版本による）37頁）参照。
- (14) 『与世山親方八重山島規模帳』（1768年 首里王府編。本稿では『石垣市史叢書』2 65頁）参照。
- (15) 安良城盛昭『新・沖縄史論』（1980年 沖縄タイムス社刊）85頁参照。
- (16) 宮城文『八重山生活誌』（1972年 自家版）375頁参照。
- (17) 宮良高弘注(1)論文には、

古見邑ユンタ

〈原歌〉

〈訳〉

クムラ ウヤギバラ ギラムヌ	古見邑 裕福な村の若者たちが
キューヌピィバ	今日の日を
クガニピィバ シラビョーリ	黄金のような吉日を調べて
カンヌマイ	神の御前
ヌシヌマイ シシヤリティ	主の御前に申し上げ
ヤイニユバ	翌年を
クナツユバ ニガヨーリ	来夏世の豊穡を祈願し給え
ヤイニユヌ	翌年も
クナツユヌ ナウラバ	来夏世も稔らば

イシミキリ		石のように固く
カニミキリ	ショーラバ	金のように固く実入らば
イシミキリ		石のように固い
カニミキリ	シヌガフユ	金のように固い有難い世である
ナイシユシ		真積して
シクラナニ	ショーラバ	倉に積む程稔らば
ナイシユシ		真積して
シクラナニ		倉に積み
イシヌカフユ		石のように固い果報である
タルカタル		誰れを
ジリガジリ	トウユマーリ	どなたをほめそやそう
カンヌマイヌ		神様を
ヌシヌマイ	トウユマーリ	主の前をほめたたえよう
タルカタル		誰れを
ジリガジリ	トウユマーリ	どなたをほめそやそう
チカサマイ		司の御前が
ティジリシヨール		手摺をされたからだ
トウユマーリ		ほめたたえよう
タルガタル		誰れを
ジリガジリ	トウユマーリ	どなたをほめそやそう
ヨモチマイ		世持神の御前を
シマムチヌ	トウユマーリ	島持の御前を ほめたたえよう
タルカタル		誰れを
ジリガジリ	トウユマーリ	どなたをほめそやそう
ギラムヌ	サヨカリ	若者や乙女たちを
トウユマーリ		ほめたたえよう

とある。

また、喜舎場永珣注(5)論文には、

古見邑ユンタ

原 歌

- 1 古見村ヌ ギリヤムヌ
ウヤキバラ
サユカニ
(囃子)
ヒーソイ ナホリイ
- 2 今日ヌ日 シラビ
クガニ日 イラビ
- 3 神ヌマイ シサレ
シュヌマイ ウンヌケ
- 4 イエンヌ世 ニガイリ
クナチィ世 ティジィリ
- 5 イエンヌ世ヌ ノウラバ
クナチィ世ヌ ミキラバ
- 6 石ミキリ
タボラル
金ミキリ
タボラル
- 7 石ミキリ
シィヌカフ
金ミキリ
シィヌカフ
- 8 ナイシユシ シィヌカフ
ツクラユシ
シィヌカフ
- 9 タルタルドゥ ティユマリ
ジリジリドゥ 名取ラリ
- 10 神ヌマイ

訳

- 古見村の優良青年達が
裕福な村（古見村の対語）の
選良若者達は
(ナホリイは稔るの意)
- 今日の吉き日を調べ（干支を調
べる）
黄金の吉日の干支をよく選んで
神様に神司から申告し
村の御役人様へも申し上げ
来年の豊作を祈願し
来夏世の満作をば予祝祈願した
来年の五穀が稔ったら
来夏世が豊穰したら
(どうか)石のように固く
稔り多い収穫があるように
金のように固い
稔りを恵み下さるように
- 固い石のように
稔り恵まれて有難い果報である
金の固さのように
稔り下されて有難うございます
- 真積みしてシィディ果報
真積みをおえて
有難い果報である
- 誰々を誉め讃えますか
どなた何某を賞讃しますか
神の大前の

- | | | | |
|----|---------------|-------------|----------------------|
| | ティユマリ | | お恵みを真先きに誉め崇えましょ
う |
| | シュヌマイ | | 次に村の御役人様の指導に |
| | 名トゥラリ | | 感謝いたしましょう |
| 11 | タルタルドゥ | ティユマリ | また誰々を讃えましょうか |
| | ジリジリドゥ | なとう
名取ラリ | どなた様をば讃えましょうか |
| 12 | かんつかき
神司マイ | | 神司の大前を |
| | ティユマリ | | 崇敬いたしましょう |
| | ティズルス | | 合掌祈願した神女をば |
| | 名取ラリ | | 称えましょう |
| 13 | タルタルドゥ | ティユマリ | つぎは誰々を賞めますか |
| | ジリジリドゥ | | どなた様の功績を |
| | 名取ラリ | | 称えましょうか |
| 14 | ユムチイマイ | | 世持役の苦労を |
| | ティユマリ | | 賞讃いたしましょう |
| | しまむ
島村チイマイ | | 島の指導監督者を |
| | 名トゥリ | | 高く評価しましょう |
| 15 | タルタルドゥ | | 次は誰々を |
| | トゥユマリ | | ほめたたえましょうか |
| | ジリジリドゥ | 名トゥラリ | どなた様をば高く見上げますか |
| 16 | ギラムヌドゥ | | 優良青年達を高く |
| | トゥユマリ | | 評価しましょう |
| | サユカニドゥ | | 選良若人たちを |
| | 名トゥラリ | | 高く見上げましょう |

とある。

(18) 宮良高弘注(1)論文に

ウムトゥ離リヌユンタ

<原歌>

ウムトゥカラ パルミズ

トゥルシカラ パルミズ

<訳>

大本から流れ出る水

トゥルシから流れ出る水

カナイヌヌバ タラショーリ	カナイ布をたらし給え
トゥイルヌヌバ タラショーリ	十尋布をたらし給え
マスミマスヌ チビナガ	マスミ田圃の尻に
アラシヌヌバ フキダシ	新しい布を吹き出し
アラシヌヌヌ ウイナカ	新しい布の上に
クマシヌヌヌ ウイナカ	クマシ布のうえに
カンドゥフニバ クサヨーリ	神舟を作られ
ヌシドゥフニバ ギラヨーリ	主の舟を作られ
クサイアル ウチナカ	作られるうちに
ギライアル アルシィナカ	製造する間に
ビフナァファ イツマラシ	男の子を最初にもうけ
ミイドゥナァファ ナウシダシ	女の子をなおもうけ
ナユドゥスディ イモッタラ	どんな子が生れるかと思ったら
イカドゥスディ イモッタラ	如何なる子が生れるかと思ったら
	ら
ビフナファヌ シナタヌ	男の子の姿が
ミドゥナファヌ タクマヌ	女の子の姿が
サキトゥマシ ウマラシ	酒を豊富に作ろう
ミシムムク チクリョウリ	神酒を沢山作り給え
ウヌサキヌ マリバナ	この酒ができた初に
ウヌミキヌ フキバナ	この神酒ができた初に
タルタルドゥ チカシヨール	誰れを招待しようか
ジリジリヌ ウトゥムス	どなたをお供しようか
ブザサケーラ チカシヨール	伯叔父さんたちを招待する
ブバマケーラ ウトゥムス	伯叔母さんたちをお供する
サキディスヤ チャバンムリ	酒は茶碗盛り
ミキデスヤ ユナスムリ	ミキは枡盛り
ユルナンカ ウフユワイ	世の中は大世である
アキヤカ マーユワイ	世の中は真世である
ウヌカフドゥ ニガヨール	この果報を祈願される

クヌカフドゥ ティズリヨール この果報を手摺りされる
とあるユンタの、第八節までがうたわれた。

(19) 注(17)参照。

(20) 喜舎場永珣注(5)論文293頁参照。この時、アカマタ祭祀の「由来伝承に何ん
らか関係があると思われる神事の際の神謡」として次の歌謡がうたわれるら
しい。

(其の1) 古見村の赤マターユンタ

原 歌	訳
シンピル マンピル ヌ	千尋も万尋もある
ファリドゥ ヌ	遠い遙かな海の彼方の
アンナン カラ	安南国から
ワタリ オツタル	渡って来られた
シィスマタ アカマターヌ マイ	「白マター・赤マター」の神様
キューヌ ピィバ イラビィ	今日の吉き日を選び
クガニ ピィバ シラビィ	この黄金の日をば調べて
ヤイヌユー クナツユーバ	来年の豊穰、来夏の豊作をば
ニガイ シィサルバ	お祈願いたしますから
ヤイヌユーバ ナウシィ	どうか来年こそは豊作の世に
クナツユーバ ミキラシィ	来夏こそは尚稔りある年に
タボーリ ユー	お恵み下さいませ

この歌謡は、宮良高弘注(1)論文に「この渡来伝説に関しては次のような『ユ
ンタ』が歌われている」として掲げられた歌謡

〈原歌〉	〈訳〉
センピロ マンピロヌ	千尋も万尋もある
ファードゥーヌ	遠い遠い海の彼方の
アンナンカラ	安南から
ワタリオオツタル	渡来して来られた
シロマタ・アカマタヌマイ	シロマタ・アカマタの御前
キューヌピバ イラビ	今日の吉日を選び
クガニピバ シラビ	黄金の日を調べて

ヤイニユー	クナツユーバ	翌年の豊穰、来たる夏の豊作を
ニガイスサルバ		祈願申し上げますから
ヤイニユーバ	ナウラシ	どうか翌年を豊作にし
クナソユバ	ミキラシタポー	来夏世を実り豊かな年にお導き
リ		下さい

を喜舎場氏が引用したものである。

(2) 現在は全9節のユンタという。宮良高弘注(1)論文に、

^{フナクイ}
舟漕ユンタ

1、^{ムトウオン}
本御嶽に対する歌

〈原歌〉

〈訳〉

クンムラ	古見邑	
ウヤキバラ	ギラムヌ	裕福な村の若者たち
キューヌピバ		今日のような
クガニピバ	シラビョーリ	黄金のような吉日を調べて
カンヌマイニ		神様の御前に
ヌシヌマイニ	スサリテイ	主の御前に申し上げ

2、^{フアオン}
子御嶽に対する歌

ヤマヤマヌ	山々の	
ムリムリヌ	マイナカ	森々の前にて
バガクユギティ		私が漕いでゆき
クリマヌキ	スサルバ	自分がお招き申し上げますから

3、アカ(シロ)ジャーマに対する歌

ウハラヌル	[上方〈東〉へ走る	
トウカマツキ	パヤザキ	トウカマツキ〈未詳〉の早先舟
ユヌフニヌ		同じ舟の
アウナミヌ	ウチカラ	友並みの内から
ヌユテイパル	サシティパル	抜きん出て走る 差し出て走る
アカジャーマ [*]		アカジャーマ]

※シロの場合はシロ
ジャーマと歌う

※〔 〕内は波照間による
補訳。

とある。

また、宮良賢貞「小濱島のニロー神」(『南島』第一輯)には

豊年祈願の神歌(船を漕ぎつゝ謡ふ)

- | | | |
|---|--------------------------------|--------------|
| 1 | 古見 ^{クシムラ} 邑 ゆすばら ぎらむぬ | 古見村 四十村の若者 |
| 2 | 弥勒 ^{ミツク} 世と むちわーる | 豊年の世を持って来られる |
| | なうる世ど むちわーる | 稔る世を持って来られる |
| 3 | 来年 ^{エシ} ぬ世ぬ なうらば | 来年の世が稔ったなら |
| | 来夏 ^{クナチ} 世ぬ みぎらば | 来夏世が稔ったなら |
| 4 | ないしゆゆし | 寄せに寄せ |
| | しいくらなみし | 後の倉庫に並べ |
| 5 | 石 ^{イシ} みぎり みぎらば | 石の実入りに稔ったなら |
| | 金 ^{カネ} みぎり なうらば | 金の実入りに稔ったなら |

とある。訳は波照間による。

喜舎場永珣『八重山古謡』(1970年・沖縄タイムス社)に、

(1) 船漕^{フナク}ギユンタ(古見)

- | 原歌 | 訳 |
|-----------------------|---------------------------|
| 1 古見村ヌ | 古見村の |
| ギリヤムヌ | 優良青年たちが |
| ウヤキバラ | 裕福な村(古見村の対語)の |
| サユカニ | 選良若人たちは |
| ソイナホリ(囃) | |
| 2 今日ヌ日 | 今日の吉き日を |
| シラビ | 調らべ(干支を調べる) |
| クガニ日 | 黄金の吉日の干支を |
| イラビ | 選んで |
| 3 神 ^{カン} ヌマイ | 神様に |
| シサレ | 神司 ^{カンツカサ} から申告し |
| シュヌマイ | 村の御役人へも |
| ウンヌケ | 申し上げた |
| 4 イエヌ世 ^ユ | 来年の豊作を |

- | | | |
|----|--------------------|---------------|
| | ニガイリ | 祈願し |
| | クナチィ世 | 来夏世の満作を |
| | ティジィリ | 予祝祈願し |
| 5 | イエヌ世ヌ | 来年の五穀が |
| | ノウラバ | 稔ったら |
| | クナチィ世ヌ | 来夏世が |
| | ミキラバ | 豊穰したら |
| 6 | ^{イシ} 石ミキリ | (どうか) 石のように固く |
| | タボラル | 稔り収穫のあるように |
| | ^{カネ} 金ミキリ | 金属の固いように稔りを |
| | タボラル | 恵み下さるように |
| 7 | 石ミキリ | 石の固いように稔り恵まれて |
| | シィヌカフ | 有難い果報である |
| | 金ミキリ | 金の固さの如く実り下されて |
| | シヌカフ | 有難うございます |
| 8 | ナイシユシ | 真積みして |
| | シヌカフ | シィディ果報 |
| | ツクラニシ | 真積みをおえて |
| | シヌカフ | 有難い果報である |
| 9 | タルタルドゥ | 誰々を |
| | ティユマリ | 誉め讃えますか |
| | ジリジリドゥ | どなた何某を |
| | 名取ラリ | 讃賞しますか |
| 10 | ^{カン} 神ヌマイ | 神の大前のお恵みを |
| | ティユマリ | 第一に誉め崇へましょう |
| | シュヌマイ | 第二に村の御役人様の指導を |
| | 名トゥラリ | 感謝いたしましょう |
| 11 | タルタルドゥ | また誰々を |
| | ティユマリ | 讃えましょうか |
| | ジリジリドゥ | どなた様を |

- | | | |
|----|---------------------------|------------|
| | 名取ラリ | たたえよう |
| 12 | ^{カンチイカサ}
神司マイ | 神司の大前（巫女）を |
| | ティユマリ | 崇敬いたしましょう |
| | ティズルス | 合掌祈願した祝女をば |
| | 名トラリ | 称えましょう |
| 13 | タルタルドゥ | つぎは誰々を |
| | ティユマリ | 賞めますか |
| | ジリジリドゥ | どなた何某の |
| | 名トゥラリ | 功績を称えるのか |
| 14 | ユムチイマイ | 世持役の苦勞を |
| | ティユマリ | 賞讃いたしましょう |
| | ^{シイワム}
島持チイマイ | 島の指揮監督者を |
| | 名トゥリ | 高く評価しよう |
| 15 | タルタルドゥ | つぎは誰々を |
| | トゥユマリ | ほめたたえるか |
| | ジリジリドゥ | どなた様を |
| | 名トゥラリ | 高く見上げますか |
| 16 | ギラムヌドゥ | 優良青年たちを |
| | トゥユマリ | 高く評価しましょう |
| | サユカニドゥ | 選良若人たちを |
| | 名トゥラリ | 高く見上げましょう |

とある。

- (22) 宮良高弘注(1)論文に「これで儀式（フナクイー引用者注一）終了であり、爬竜船競技がおこなわれる。これが終わったあと舟子たちは御嶽へ行く。そのとき次のような歌をうたう」として、

〈原歌〉

ヤイニユーバ
クナツユバ ニガイ
クナツユバ ティズリ
ヤイニユーヌ ナラウバ

〈訳〉

翌年の豊穰を
来夏世の豊穰を祈願し
来夏世を手摺りし
翌年が稔らば

クナツユーヌ ミキラバ

来夏世が実入らば

とある

- (23) 宮良高弘注(1)論文によると、「『アカマタ・クロマタ』は、部落はずれの道をとおって請原御嶽の前から部落へ入って来る。この道中で次の「『^{トウルク}通のユンタ』がうたわれる」として次の歌詞を掲げる

^{トウルク}
通のユンタ

〈原歌〉

クンムラ ギラムヌ
ウヤキバラ サヨガネー
キューヌピィバ シラビヨーリ
クガニピィバ イラビヨーリ
カンヌマイニ シシャリティ
ヌシヌマイニ ウヌキティ
ヤイニユーバ ニガヨーリ
クナツユーバ ティズリオーリ
ヤイニューヌ ナウラバ
クナツユーヌ ミキラバ

(以下神の言葉とされる)

イシミキリ ショーラバ
カニミキリ ショーラバ
イシミキリ シヌガフ
カニミキリ シヌガフ
ナイシユシ ショーラバ
シクラナミ ショーラバ
ナイシユシ シヌガフ
シクラナミ シヌガフ
タルタルドゥ トウユマール
ヂリヂリドゥ ナトゥラリ
カンヌマイヌ トウユマール
ヌシヌマイヌ トウユマール

〈訳〉

古見邑の若者たち
裕福な村の青年たち
今日のような吉日を調べて
黄金のような吉日を選んで
神様の御前に申し上げて
主の御前に申し上げて
翌年の豊穰を祈願し給え
来夏世を手摺りし給え
翌年も稔らば
来夏世も実入らば
石のように固く稔らば
金のように固く稔らば
石のように固い稔り果報である
金のように固い稔り果報である
真積みする程稔らば
倉積みする程稔らば
真積みすれば果報である
倉積みすれば果報である
誰をほめそやそうか
どなたを名取られようか
神様をほめたたえよう
主の御前をほめたたえよう

(この二行をもう一度繰り返す)

タルタルドゥ	トゥユマール	誰をほめそやそうか
ジリジリド	ナトゥラリ	どなたが名取られようか
ツカサマイヌ	トゥユマール	司の御前をほめそやそう
ティズリシューヌ	ナトゥラリ	手摺り主が名取られよう

(この二行をもう一度繰り返す)

タルタルドゥ	トゥユマール	誰れをほめそやそうか
ジリジリドゥ	ナトゥラリ	どなたが名取られようか
ユムツマイヌ	トゥユマール	世持神の御前をほめたたえよう
シマムツヌ	ナトゥラ	島持が名取られよう

(この二行をもう一度繰り返す)

タルタルドゥ	トゥユマール	誰れをほめそやそうか
ジリジリドゥ	ナトゥラリ	どなたが名取られようか
ギラムヌヌ	トゥユマール	若者たちがほめられよう
サヨガネヌ	ナトゥラリ	乙女たちが名取られよう

(この二行をもう一度繰り返す)

とある。

- (24) 宮良高弘注(1)論文に「トゥニムトゥの門に入る瞬間に『出入のユンタ』^{ディリス}が始まる」として次の歌詞を掲げる。

^{ディリス}
出入のユンタ

〈原歌〉

ウフユ ムチワール
 ピルユ ムチワール
 ナウルユバ ムチワール
 ミキリユハ ムチワール
 ヤイニユヌ ナウラバ
 クナツユヌ ミキラバ
 カンヌマイニ シシヤリティ
 ヌシヌマイニ ウヌギティ
 ヤイニユバ ニガヨーリ

〈訳〉

大世をもたらされる
 広世をもたらされる
 稔り豊かな世を持って来られる
 実りの世を持って来られる
 翌年が稔らば
 来夏世が実入らば
 神の御前に申し上げて
 主の御前に申し上げて
 来年の豊穰を祈願し給え

クナツユーバ	ティズリオーリ	来夏世を手摺りし給え
ヤイニューヌ	ナウラバ	翌年も稔らば
クナツユーヌ	ミキラバ	来夏世も実入らば

(この後、トウルヌユンタの下句―神の言葉―を歌う)

また、宮良賢貞「小濱島のニロー神」(『南島』第一輯・1940年)に「赤マター白マターの各戸を訪れる時の神歌」として

1	なうる世ば	持ちとわーる	稔る世を持って来られる
	みりく世ど	持ちわーつた	弥勒世〈豊年〉を持って来られた

(『南島』第一輯)

が掲げられている。また、喜舎場永珣注(5)論文に

大世持オリヨン	大豊穰の神が御出ましになった
広世持オリヨン	広豊年の神が御入来遊ばされた
ノウル世持チヨウル	豊作の世をば持って来られる
ミキリ世持チヨウル	稔る世をば持って来られる
石ミキリタブラル	石の如く固い豊穰の世を恵まれるように
金ミキリタブラル	金の如く固い豊作の世を給われるように

とあり、「そしてこの歌の直後に、『アカマター・ユンタ』が唄われる」とある。

更に、喜舎場永珣『八重山古謡』(1970年・沖縄タイムス社刊)にも

「トゥニムトゥ家でのアカマター歌について

北の村にはトゥニムトゥ家が2軒あって、そこに男女が集合している時に、南の村はトゥニムトゥ家1軒に男女が集合している時に謡う。」として本歌が掲げられている。

(25) 宮良高弘注(1)論文によると、この時「ウムトゥ離リヌユンタ」がうたわれるという。本歌の歌詞は注(18)参照。

(26) 喜舎場永珣注(5)論文に

原 歌	訳
トウシィ トウシィ ヌ	毎年御出でになられる
シィスマタ	白マタの神様
パタパタ ヌ	季節ごとに来られる
アカマタ	赤マタの神様よ

バガリブシヤーニ ヤスン	名残りおしくて別れられません
ヌキブシヤーニ ヤスン	どうにも離れられません
ナユバ シイドゥ	如何様にして
バガリヨール	お別れいたしましょうか
イカバ シイドゥ ヌキヨール	どんな方法で離れましょうか
バダバ ヤミ ワカリヨール	心を痛めてお別れしましょう
キムバ ヤミ ヌキヨール	肝をいためて離れましょう
ヤイニ ワーリ	来年もまたいらっしゃって下さい
シヤスマタ	白マタの神様
クナツ ワーリ	来夏もまたお出で下さい
アカマタ	赤マタの神様
ヤイニ ワーリ	どうぞ来年も来て下さい
ハナシヨーラ	ともに語りましょう
クナツ ワーリ	是非来夏もお出下さい
ハナシヨーラ	ともにお話しいたしましょう

とある。

(27) 宮良高弘注(1)論文227～228頁参照。なお、同論文の「ママリヌユンタ」は次のとおり。

〈原歌〉

ニウスイヌ ウンサグ
 パユシバド^{*} ユワナウル
 ウヤキナガザラニ
 ンデイツキド ミハイシヨール
 ママリヤ タルガママリ
 ジリガママリ
 イババシカシ
 ユマバシカシ
 ターママリネーラ

〈訳〉

根掩い（粟）の御神酒を
 はわせればこそ豊穰となる
 裕福な中皿に
 一杯注いでいただきますよう
 ママリは誰れのママリでしょう
 どなたのママリでしょう
 云って聞せなさい
 読んで聞せなさい
 誰れのママリでしょうか

※ パユシ、つまりはわせるということは、御酒の入った大盃を両手で左右に動かすこと。

(28) 宮良高弘注(1)論文に「一般に古見の日常生活では、ギラムヌになる前は、たとえばユンタの中で『ウイタビヌプリムヌ (気ちがい)、マタタビヌマシムヌ (愚か者) と冷かされ馬鹿にされるという屈辱に甘んじなければならない。ここで、その掛け合いのユンタをみよう」として、次のとおり、本歌の第21節以下が掲げられている。

(先輩) ウイタビヌプリムヌ、アラタビヌマシムヌ、イザバイヂカイシ、ミチシシンナ、ウイタビ、ユマバユミカイシ、ミチシシンナアラタビ (ウイタビの気ちがい、アラタビの愚か者、問えば問い返す道を知っているのか、ウイタビ、聞けば聞き返す道を知っているかアラタビ)

(後輩) クトシヤリバド、バナフリタル、ヤイニカラ、ガルマキトゥラスンドー (今年だからこそ自分は馬鹿にされるが、来年からは頑張るぞ)

(先輩) ウイタビヌミンタマ ミルカラ、アミフルガラスヌ、ミンタマミルソジャー (ウイタビの目玉を見ると、雨にぬれた鳥の目玉をみるようだ)

(後輩) ギラムヌヌミンタマ ミルカラ カヂフキヤギオーヌ ミンタマミルソジャー (ギラムヌの目玉をみると、風邪を引いた痩せ豚の目玉をみるようだ)

(若者) クンヅミスディナヤ ナユシャルムヌヤリヤド ミヤラビユムドバ カイカクシオオル (紺染めの腰巻きは美しいものだが、乙女よ自分の体をなぜかくすのだ)。

(娘) ビギリヤマヤ、ナユシャルムヌヤリヤド、クンヅミスディナドゥ、リンチバムツチオオル (若者は、美しいものなのに、紺染めの腰巻きに、なぜしつとをするのだ)

(若者) クスブルカカンヤ ナユシャルムヌヤリヤド、ミヤラビウクスバ、カイカクシオオル (腰巻きは美しいものなのに、乙女よ、なぜ腰をかくすのだ)

(娘) ビギリヤマヤ、ナユシャルムヌヤリヤド、クスブルカカンド、リンチバムツチオオル (若者は、美しいものなのに、腰巻き

になぜ嫉妬をするのだ。)

- (若者) バダイリマイチャ、ナユシャルムヌヤリャド、ミヤラビピサ
ガマ、カイカクシオオル(綿入れ女禪は、美しいものなのに、
乙女の女陰をなぜ隠すのだ)
- (娘) ビギリヤマヤ ナユシャルムヌヤリャド、バタイリマイチャ
ドウ、リンチバムツチオオル (若者は、美しいものなのに、
綿入れ女禪に、なぜ嫉妬をするのだ)。